

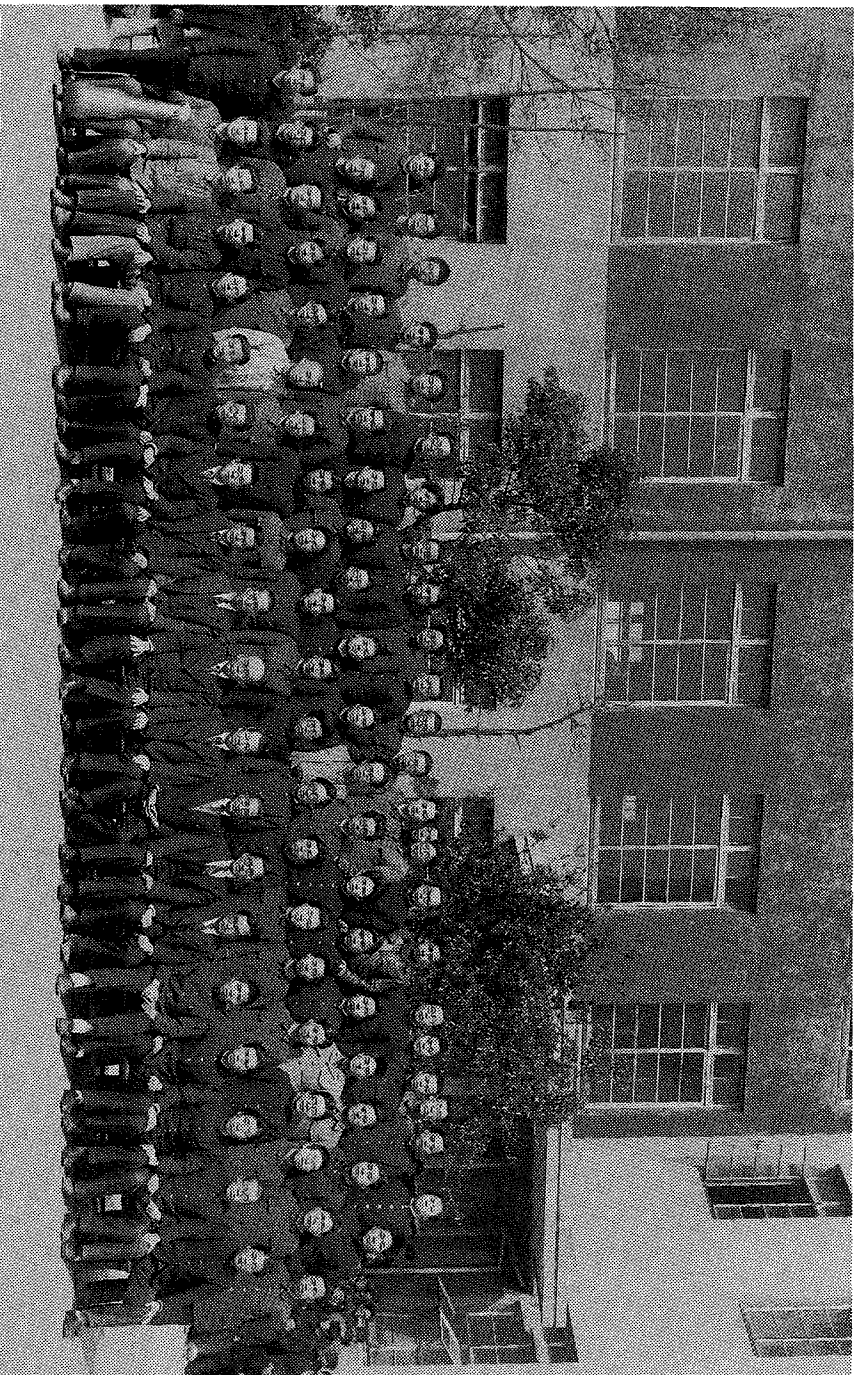
激動の青春譜

神戸大学 暁木会十六期生

『暁木会』と神戸工専

『暁木会』は元神戸高等工業学校土木科、元神戸工業専門学校土木科、神戸大学工学部土木工学科、同大学院工学研究科（土木）の卒業生並びにこれに準ずる者によって構成されている。設立は昭和四年。

神戸高等工業土木科は昭和四年四月に開設。同十九年四月、第十六期生入学時から「神戸工業専門学校」と改称され、同二十四年五月、神戸大学発足と同時に同大学土木工学科となり現在に至る。



神戸工専土木科第16期卒業式の日（昭和21年3月15日）

校歌

一、延元偲ぶ菊水の 流れも清き湊川
岸辺にかほる楠の 気高き影に育くまる
赤き薔の鳳雛は 立ちて世界に雄飛せん
飛べよ！ 飛べよ！ 世界に

二、前に聳ゆる鷹取の 峰より高き理想もて
須磨の浦わに寄す波の 不斷の努力規律あり
やがて奪はん造化の工 我が高工の意気見せん
見せよ！ 見せよ！ 意気を

発刊にあたって

我々神戸工専（現神戸大学土木工学科）十六期生は巷で『撃ちてし止まぬ』のスローガンが叫ばれ、太平洋戦争の戦局が悪化の一途をたどりつつあった昭和十九年四月に入学。軍需施設への動員あるいは大空襲による母校焼失など厳しい状況下におかれ、やがて二十年八月敗戦を迎えた。そして政治・思想・社会構造が百八十度転換し、民主主義、平和論、教育論、経済優先の声が吹き荒ぶる中、二十二年三月、学窓を巣立ったのである。

我ら三ヶ年の蛰雪時代は、正に二十世紀中最大の歴史的転換期に差し掛っており、人生における最も多感なる時期に、激しく揺れ動いた歴史の波を真つ向うから受け止めたのであった。

この熾烈を極めた貴重なる体験は、我々一人一人のアイデンティティとなり、その後の人生や実社会に対処する上で大きな支えとなるのである。

卒業以来、早くも五十余年の歳月が流れた。当時、理想に燃え真理の探求に口角泡を飛ばしていた美青年も、いまや白髪混りや髪薄き風貌となり、古稀を迎えた。誰しも敗戦後の激動の中、山あり谷ありの人生もしくは社会経験を積み重ねて来ている。その原点とも云えるのが、本書の

冒頭に収録の『回想史』である。これは十六期生が卒業を目前に控えた昭和二十二年二月の時点において、過ぎし三ヶ年の学園生活を振り返り、心に浸み込んだ出来事あるいは魂の叫びなどを披露。さらに新生活への門出にあたっての決意を述べたものである。

そして同年三月、ガリ版刷りによって発刊。編集者たちは、各々の前途に待ち受けている人生や社会生活の上で、同書が何らかの意義を持つはなむけの書であることをこい希って送り出した。以来、半世紀の星霜を経てここに平成十年を迎える。この間、各人各様に人生の軌跡が描かれていくが、十六期生としてのアイデンティティは、依然として生きつづけており、熟年を迎えたいま、改めて同書をひもといてみるのも無意味ではあるまい。

これが本書刊行に踏み切った所以である。付記として『社会人として』と『往時を偲ぶ座談会』を掲載。永久保存版として関係者はもちろんのこと、次代を担う世代たちの目に広く触れることを願わずにはいられない。

最後に他界された敬愛おくあたわざる恩師、級友たちのご冥福を心よりお祈りすると共に、本書刊行に当たり献身的に努力を傾注された編集委員、就中森繁一代表委員、並びにあたたかいご支援ご指導を頂いた関係各位に深く感謝の意を捧げたい。

平成十年四月吉日

林 晴 直

目次

『暁木会』と神戸工専	2
校 歌	4
発刊にあたって——林晴直	5
第一章 卒業直前	
回想史刊行に當りて	15
教授より卒業生へ	
卒業生諸子に送る——校長 田中重芳	16
感 想——土木科長・教授 櫻井季男	18
近頃うれしいこと——教授 武田英吉	21
日記の中から——教務課長・教授 林連一	22
世界に雄飛する子へ——教授 梶田哲治	36
はなむけのことば——教授 樋渡正美	38
期 待——教授 木村恵雄	41

卒業生の記

動員配置転換運動の真相	44
嘆願書	46
憶いは今も鮮やか——青山正樹	49
ペンをハンマーに代えて——浅野富美雄	54
初恋——荒城阡治	56
排球部生活雑感——猪口弘	60
回顧——岩本哲雄	63
校友会——大西禮二郎	65
演劇コンクール——岡島博	68
土木科時代——鍛治拓美	70
土木の使命——片岡勇	72
動員、勉強——喜多村弘	74
夢さめて——くにのぶしげま	77
黒帽子——栗川淳	81
迷いと反省——小山清	83
混乱時代——好田豊	84

衝撃の振子——河野道雄	86
Leben ist Kampf——佐々木司郎	89
吾が土木時代を語る——酒井武彦	92
暗中に光明を見出す——島谷敬一	94
雑炊と野球——鈴木泰次	95
天分を信じる——鈴木安重	97
多彩な経験——多田隆一	99
伝統的スピリット——大工原襄	101
展望台——玉川新作	103
変動の三か年——寺尾昭	108
シビルの歌——豊久政邦	110
三年間——中西猛仁	112
演劇——西川龍三	114
記念祭演劇『老人の画像』に就いて	116
自覚なき学問——西本博	118
固いパン——幣守昭	120
真実——野村靖二	122

運の神——橋本英一	123
思索遍歴——畑良昌	124
青春の杯——浜崎一博	127
悲しさと喜びと——濱名照夫	129
行動と反省——林晴直	131
焦燥——伴重雄	138
生への信賴——藤井基夫	140
日記の一断片——間嶋力	143
束縛から解放へ——前川重義	145
混乱期の中の愉しみ——巻島徹夫	147
仙人——股野宏志	149
回顧断片——村田勇	151
真摯——森繁一	152
友情——薬師寺克己	155
人間味——山田直靖	156
懺悔三年——山根敏弘	158
学窓を去らんとして——山村壽一	160

哲学と科学——岡克己	163
雑文——幣守昭	169
徒然草——荒城阡治	173
シヨーパーンハウエルの哲学——酒井武彦	185
音楽漫談——中西猛仁	187
能楽餘談——安東安彦	191
第十六期生三年間の変遷	196
編輯後記	201
第二章 卒業三十年後	
戦中と戦後と——林晴直	202
激動の学窓生活——畑良昌	217

第三章 卒業五十年後

神戸工業専門学校土木科十六回卒業生諸君の

卒業五十年に際して——神戸大学名誉教授 田中茂……………225

古稀の憶え書——青山正樹……………234

学窓三か年——神澤輝雄……………240

夕映えの秋の日に——国信茂磨……………246

卒業五十年を顧みて——佐々木司郎……………251

双六の上がり——大工原襄……………253

官立神戸工業専門学校時代——多田隆一……………257

第二の職場人生——中澤義雄……………261

故郷——西川龍三……………266

時の氏神——畑良昌……………272

卒業後の軌跡——林晴直……………274

交友記——藤井基夫……………277

学窓と社会——巻島徹夫……………283

我が人生に悔いなし——松末誠一……………286

半世紀——松本一郎……………291

海軍施設部動員日記残照録——二好通雄……………294

理想と現実——森繁一……………297

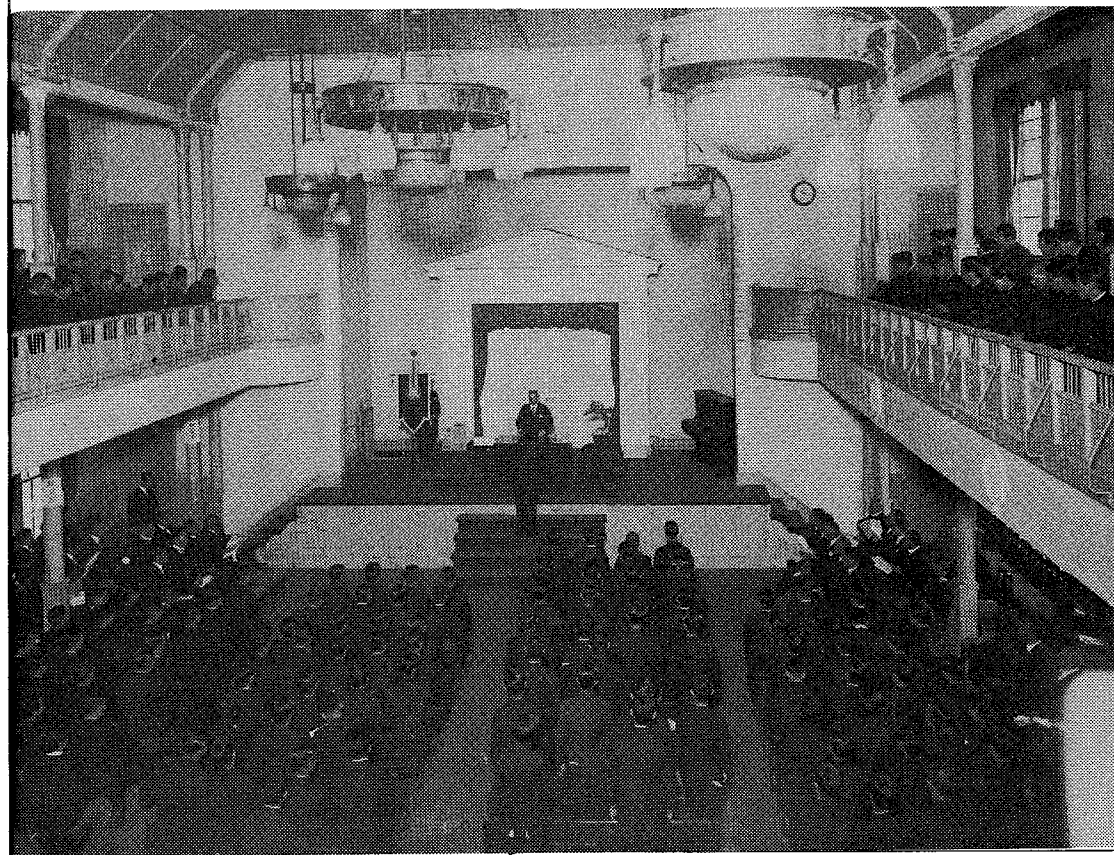
第四章 『暁木会』十六回生座談会

学徒動員と民主化の嵐の中の青春期……………300

教官名簿……………325

第十六期卒業生名簿……………326

編集を終えて——森繁一……………329



神戸工専第16期生の入学式（昭和19年4月8日）

第一章 卒業直前

回想史刊行に當りて

十六期三ヶ年の學生生活の終止符はまさに打たれんとしてゐる。やがて運命は我々を判の社会へと運んで行く。一切の幻影を捨て、一切の嘆きをやめ、あらはなる現実を見つめよ。新しき歩みは其処から始まる。そこには既に生命を終へて死滅しつつあるものと、新しく生れ生長しつつあるものとの交錯がある。併し旧きものは決して易々と席をゆずるべきものではない。新しき生命は生命を終へたものに對する徹底的な批判であり、生長するもののための建設の戦でなければならぬ。

此の大なる転換の歩みのために、この回想史は刊行される。これは現代及未来の最も切実な課題に一石を投じ、その解決のために廣い見透しと正しい方向づけとを与へんがために生れた。活路は未来にあり、希望は十六期生の新しき歩みにある。

最後に三ヶ年間御指導下され、且つ本回想史刊行に多大の御盡力をされた諸先生に對し満腔の謝意を捧げると共に、今後の御指導を宜敷御願ひする次第である。

私は一昨年七十歳(古稀)で、国鉄二十年、関連コンサル二十八年の勤めをまずは無事に終えた。それを機会に今まで歩んで来た人生を振り返って記録し、二人の娘に贈るため「古稀の憶え書」と題した自己史をつくった。

自分史と言うと大仰であるが、A四版六十頁、作成部数五部、ワープロは下の娘がやってくれたので、時折りの家族写真のカラーコピー代を含め出費約八千円というささやかなものである。

それから二年が経ったが昔の憶い出に変わりはないので、神戸時代の部分を皆さんに見て頂き、懐かしい学生時代を偲ぶことにした。

神戸時代

敗戦まで(昭和十九年四月―二十年八月)

私はどちらかといえば、文科系にむいていたが、文科系の学生には徴兵猶予がなく、二十歳になれば学業を中断して軍隊に入らなければならなかった。一方理工系は産業の振興に役立てるため、徴兵は卒業まで延期されていたので、早く国の役に立つ仕事につきたいと工業専門学校を選んだ。なかでも土木科を選んだのは、当時南方

の戦場での飛行場などの建設に男らしさを感じていたこと、また中学時代の親友川島君の家が土建業で、彼も土木に進むことなどが理由であった。

昭和十九年四月に入学したが、戦局はいよいよ緊迫し、学業はそつちのけで左記の箇所へ次々と勤労動員に駆り出された。ちなみに当時、休みは月に二日で、それ以外は土曜も日曜も平日どおりの勤務であった。

動員先	期間	作業内容
川崎造船所	三ヶ月	朝鮮から強制連行された徴用工が鋳締めをする鋼材を、図面に合わせてボルトで所定位置に仮締めを行う。
三菱造船所	三ヶ月	体当たり用の特殊潜航艇のエンジンの組み立てなど。
神戸市役所	三ヶ月	神戸の陸軍高射砲陣地の三角測量。
呉海軍施設部	一週間	市内の家屋の焼失状況調査。
倉敷建設部隊	二ヶ月	施設関係の教育。 水島工業地帯の軍需工場を疎開させるための用地測量その他。

昭和二十年五月に大阪の十三地区は焼夷弾攻撃により、一面の焼け野原になった。神戸の動員先からかなりの区間電車が不通であったので、線路を歩いてやっと十三に着き、幸い父母と無事に会うことができた。家が焼けたことについて父は涙ぐんでいたが、私は他の人並になったかと思えばほとんどダメージを感じなかった。当時の異

常な心理である。

玖村金男さん（岡山の玖村の親類）が国鉄に勤め、吹田操車場の独身寮の寮長を兼務していたので、母とともにひとまずお世話になった。その後父は勤務先の寮へ、母は岡山の親類に、私は呉海軍施設部へと別れ別れとなった。

神戸市役所への動員中は昼食として一人にコッペパン二ヶが支給され、代表が製パン工場へ行ってもらって、みんなでいっしょに食べた。もちろんバター、ジャムなどはいっさいないが、焼きたてのコッペパンは実に美味かった。また昼食時に測量のため高射砲陣地へ行くと、当番兵が気をきかせて牛丼を食べさせてくれた。民間では口に入らぬ白米に牛肉がたっぷりのっかっており、このうえないご馳走であった。

呉海軍施設部への動員がえは、クラスの有志が呉まで嘆願書をもって出向いた結果であった。直接戦力に加わりたい一心からであったが、校長の逆鱗にふれ、首謀者は残されて貯水槽掘りなどをさせられた。私は自宅が焼失したためその運動に加わっていなかったので、江田島でこたまノミに食われながら一週間ほど教育を受けた後、郷里が岡山ということで倉敷の建設部隊に配属となった。当初四人の級友といっしょであったが、六月末水島の飛行機工場を伯備線の豪溪の山奥に疎開するため、薬師寺君（故人）と二人現地で測量などをしていうちに終戦となった。終戦の玉音放送は谷間のことで聞きずらかったが、私がポツダム宣言の受諾という言葉聞きとめ、無条件降伏ということがわかり大騒ぎになった。数日後別れの宴があり、酒がないのでマツカリンという朝鮮のどぶろくをしたたか呑み、みんなダウンしてしまった。しかし私だけは平気で風呂に入りについて、みんなに呆れられ、初めてアルコールに強いことを知った。

倉敷の部隊にかえって、木材・セメントなど保有していた資材を無料で民間に放出した後、それぞれの郷里に帰ることとなった。当時トラックの燃料は木炭で、それを東北まで行くため荷台に山のように積み上げ、その上が我々の座席であった。道路は舗装されていないので、穴ぼこが多く振り落とされないよう夜つびいて必死にしがみついていた。夕方に倉敷を立ち、翌朝早くやつとの思いで大阪に着き、また吹田の国鉄寮にお世話になった。

戦後（昭和二十年九月―二十二年三月）

戦争で多くの家屋が焼失したため、畳敷に余裕のある家は戦災者に部屋を提供しなければならないという法律がでるとの話があった。家族づれに長くいられては困るが、学生なら卒業すれば文句なしに出て行くという計算からか、学校のすぐ近くの高田という大きな邸宅から学生をおいてもよいと学校に連絡があった。土木科では私・岡・大西・福岡（故人）の四人と機械科の二人が下宿させてもらうことになった。高田家は父親と娘三人、息子一人で、木造ではあったが二階が五部屋もある立派な家であった。応接間にはピアノ、電気蓄音機等があり、初めてベーターベン（？）の「運命」など聞かせてもらった。我々四人は眺めのよい八畳二部屋を占領し、きれいな部屋に万年床で、週一回掃除をするのがやつとというありさまであった。食糧事情は最悪で、いつも腹をすかせていた。また変圧器がパンクして、長期間停電が続くことがあった。夜遅くなると腹が減ってきて、よく電気パンなるものをつくって四人で食べた。電気パンとは十×十×十五センチくらいの木箱の両側に銅板を入れ、洗濯ばさみで、電気コードをほぐして取り出したプラスとマイナスを接続する。この銅板の間に、さいの目に切ったさ

つまいもなどを入れた小麦粉にふくらし粉を入れて流し込み、電気を通すと蒸しパンのようなものができるという代物である。

また岡君は岡山の農家の出で、近くの水路で捕れた大なまずの干物をたくさん持ってきてくれていて、貴重なタンパク源として電熱器であぶって醬油をかけて食べた。岡・大西君とも今も親しい交際が続いている。

戦災で十三の家が焼失して、家族がバラバラになっていたが、幸いなことに二十一年の初めころ、倉敷市水島の軍需工場の杜宅が大量に空いており、戦災者を優先的に入居させてくれることになった。上海にいた兄、満州にいた姉、満州からシベリアに連行された義兄も逐次帰国し、この家でしばらく体を休めることができた。

食糧難のため家の周囲には、朝顔の代わりに南瓜のたなが作られ、茎や葉をおひたしにして食べた。さつまいももなかなか口に入らず、茎をゆでて油で炒めて食べた。海岸の岩についている天然のかきや小さい水路にいる川エビも貴重な食べ物であった。

敗戦の秋、勤労働員でお世話になっていた豪溪の村の助役さんが、遊びにくるようになってくれたのを思い出し、厚顔にもおじゃました。この年松茸は大豊作で、裏山に登るとおもしろいほど採れた。夕食のおかずはすべて松茸のオンパレードであった。帰りに土産用に少し分けてもらったが、なんと一貫目(三・七キロ)。サツマイモが八円、松茸は五円であった。当時は食物の価値はカロリーが第一で、香りの松茸はおよびでなかったのである。今庶民には手の届かぬ松茸を見るたび、私はこのことを思い出すのである。

二十一年の夏、私は岡山県の倉敷土木事務所にアルバイトに行っていたが、ある日兄と下津井海岸へ海水浴に行った。そこで親子三人できていた小原家と出会い、母親が倉敷に住んでいるので訪ねてくるよう住所を教えて

くれた。数日後土木事務所でその住所を調べると、すぐ近くであることがわかりお訪ねした。それが縁で常代との交際が始まり、一年後に婚約、二年後に結婚することとなった。敗戦により今までの価値観が根底からくつがえり、何を目標に生きていけばいいのかわからず、前途に光の見えない虚脱状態から立ち直る大きなきつかけとなったのは確かである。

以上、振り返ってみると、現在の平和で贅沢な学生にくらべ、まさに天地雲泥の差の厳しい生活環境で、よく学生生活がおくれたものと今更のように感心する。

しかし、クラスに活気があり、今につづくよい友人に恵まれ、さらに若さという力もあったのであろう。不思議に辛かったことや、いやで仕方がなかったという記憶はない。むしろそれなりに結構楽しく、有意義な学生生活であったと思っている。

最後に、娘へ贈る手前、恋愛・結婚については数行ですませているが、卒業の翌年結婚したので今年十月に金婚式を迎えることになる。

彼女は民生委員十五年、太平洋美術会会員で一昨年、銀座の画廊で、ろうけつ草木染の個展を開き、現在も精進している。

在学中に生涯の頼りになるベストの伴侶にめぐり会えたのは、私一人ではないかと感謝している。

学窓三か年

神 澤 輝 雄

一期生の時

〈入学式〉

十二人に一人という難関を突破してきた英才が八十名。教官・上級生の居並ぶ中で、入学式は高工神社前で厳粛に挙行された。宣誓をしたのは総代の畑君だったと思う。式後校内を案内してもらったが、中学時代の物理・理科教室に比し、広さや実験設備等のスケールの大きさにまず驚かされた。

〈柔道部の歓迎会〉

中学時代五年間柔道部に入っていたので、待ちかまえるように先輩からの勧誘があり入部した。早々に歓迎会があったが、戦時中ながら当時はまだ料亭も開かれており、元町駅南の南京町の店に案内された。当時の私も大柄の方であったが、柔道部の先輩には圧倒されそうな体格の人ばかり。しかし風貌とは違い、高工の歴史、柔道部の紹介などの説明は丁寧、穏和なものであった。

その後、宴会になると飲めや歌えや踊れの凄まじいもので、中には裸踊りを披露する人もあった。コップ酒で一升瓶が次々と空いていく。私も親父譲りで酒には強い方だが、先輩には及ばなかった。翌日頭の痛いのを我慢

して学校に出たのを覚えている。

〈青野ヶ原での軍事演習〉

当時は戦時のため半年繰り上げて二年半で卒業となっていた。その為授業は一日八時間という厳しいものであった。軍事教練も週三時間以上配属将校の下、課せられた。

その中で唯一楽しかったのは、五月十六日から約一週間播州平野の「小野市」「加西市」にまたがる「青野ヶ原」での軍事演習であった。昼間は教練で大変であったが、夜は兵舎に八十名が合宿し、あっちこっちで盛大なコンパが行われた。仲々芸達者な者もあり珍芸に大笑いしたものであった。しかしこれが各人の本当の手柄を知るときかけとなり、本当の友人としてつき合えるようになったのではないかと思われる。

〈学徒動員令による出動〉

昭和十九年十一月三日、我々に学徒動員令による出動命令が出され、川崎艦船造船所と神戸三菱造船所に出動した。作業は朝八時から夕方五時までであった。川崎造船所に配属された私は短期間の訓練の後「グラインダー」操作の補助員に任命された。流れ作業で鋼鉄の塊が次々と先輩の工員から送られてくる。それをグラインダーにかけ次の工員に送らねばならない。手を抜く間がない。軍需工場の厳しさをまざまざと見せつけられた。その内工学部土木科と云うこともあり、専門を生かしてB29の攻撃に備え防空壕の建設に従事することとなった。作業は憲兵の厳しい監視の下に行われた。その監視の目を潜り、親しい友人数名が工場の陰で世界観・人生観を論じたものである。しかし憲兵もその道の達人。論談にふけている学生を発見し、工場の一隅に連行し「腕立て伏せ一時間」という処分を科した。忘れられない経験である。二十年三月学校に復帰した。

〈学校の焼失〉

昭和二十年三月十七日、深夜神戸市はB29の大空襲を受け、母校の建物設備の大半は消失した。幸い土木科本館と実験室の一部が焼け残った。翌十八日兵庫区長田区を廻ったが見渡す限りの焼け野が原、建物らしきものはすべて消失していた。焼け跡から近親者をやと掘り起こし、焼けて小人のように小さくなってしまった遺体に取りすがり、悲嘆にくれる姿を随所で見かけた。戦争というものの悲惨さ非人間性を痛感させられた。

二期生の時

〈神戸市港湾局への動員〉

学校も焼失し教授も出征されたため授業も行われなかった。二十年四月、神戸市港湾局に動員された。港湾関係の業務を行うのではなく、専ら疎開跡地の防火水槽建設工事に従事した。

その時期戦局はいよいよ逼迫し、我々と同年輩の者が特攻隊となり米艦隊に自爆攻撃を行い、或いは南方戦線では飢えと病魔に襲われながら戦っているのを聞くにつけ、同じ若者として耐えられず、学校当局に「現在の動員を直接戦力に貢献する動員に配置転換」するよう強く要求した。この運動のイニシアチブをとったのは時の総代林君だったと思う。

〈海軍施設部への出動〉

先に述べた経緯により呉と大阪の海軍施設部への出動となった。二十年七月八日、呉海軍施設部へ出動の級友

送別会が神戸駅前で開催された。送る者送られる者涙無くして語れるものではない。死を怖れるのではなく再び会えることがない親友同士が慟哭していた。今でも忘れられない感激の一時であった。

私は兵庫県加古川市の北西部に当たる北条町の海軍施設部に配属となった。

ここで特記すべき事は、私たち「転換運動」を行った人物十二名が「無期停学処分」を受け、七月十日から二十日間、神戸市平野浄水場で沈澱池の底に集積している汚物を鍬で除去する作業を、一日八時間休みなしにやられた。監督は木村教授だったと思う。厳しい監視の下での作業であった。木村教授を恨むわけではないが、炎天下の重労働はきついものであった。若かったから耐えられたのであろう。青春の一駒である。

「平野浄水場」の重労働の後、北条町の施設部に出動した。僅かの教示と訓練を受け現場に出た。軍服には海軍準尉の肩章がついていたと思う。作業は川西航空機(株)の地下工場、本土決戦に備えた地下要塞(迷路のような隧道に所要所にコンクリートの部屋を作るだけ)の建設であった。施設部から現場まで一キロメートルほどあった。その往來に専用のサイドカーを与えられた。その時既に米空軍は制空権を得ていたので、グラマン機が各所で攻撃を行っていた。私も何回か機銃掃射を受けた。生きておれたのは悪運の強さだろう。しかし七年間の柔道訓練のお陰もある。サイドカーの運転手は銃撃で死亡しても、私は車から飛び出し柔道の受け身の方法で溝に飛び込んだのである。

そこで終戦を迎えた。ここには食料も豊富にあったので、これをトラックに山積して上官の許可もなしに逃走して行った者もあった。私は八月十七日施設部長より帰任を命じられ実家に帰った。米一斗を受けたことを覚えている。これが戦後の混乱の始まりであろうか。

〈学生大会の開催〉

終戦と共に共産党の野坂参三が中国から帰国した。網走刑務所に入獄していた徳田球一を始め多くの共産党員が解放され、全国で党の活動を開始した。このような情勢の中で神戸工専に於いても反動教授の追放、学園の民主化が叫ばれる処となった。二十年十二月四日、学生大会が開催され、上記のことについて激しい討論が行われた。結論は焼失した学校の復興をまず実行すべきであると言う事であった。

〈新校舎への移転〉

桜井土木科長が二十年九月に復員され、一方古宇田校長が二十年十一月に退官された。後任に盛岡高専から石原富松先生が赴任されたが間もなく公職追放令で退官された。学校当局の体制も十分確立していなかったが、先の学生大会の多数意向もあり、各教授が神戸市始め各方面へ働きかけ、二十一年五月「松野実業校」に一部移転が決まり、授業が本格的に再開された。

二期生の時

〈私の生い立ちと兄からの思想の影響〉

塩田業主であった祖父は播州飾磨郡木場（現姫路市）で江戸時代から庄屋を勤め、明治に入って村会議員十八年、村長十二年を歴任した。しかし永らく政治に関わった為多くの資産を失った。この祖父の血を受けたのか兄も私も政治に関心があり、中学時代から「貧乏物語」「女工哀史」「蟹工船」「日本共産党史」等を読んでいた。

神戸工専に入ってから河合栄治郎、西田幾太郎、三木清などの図書も乱読していた。このようなことで神戸工専入学当時から言うなれば左傾の人間であったのだろう。

〈復興記念行事開催〉

二十一年十一月七日から体育大会が本校校庭と松野実業校庭で行われた。ラクビーは機械科に負けたが、他の種目では勝利を得、土木科が総合優勝をした。仮装行列も仲々好評であった。ファイヤーストームは土木本館前で行われたが、それはそれは盛大なもので、若いエネルギーが一挙に発散されたのであろう。大いに飲み歌い且つ踊り廻ったものである。

〈社会研究部の発足〉

二十二年、三学期となるとそろそろ就職の準備もしなければならぬ時期である。ところが就職のことより日本共産党の「学生フラクの研究会」に放課後同期の滝野君とよく出ていた。そのような経緯から松野実業の一室を、社会科学研究室にする許可を得た。二十二年一月に滝野君、機械科の常田君等三十名で「社会科学部」を創立し、二十二年二月一日付けで「社研ニュース」を発行した。又各教室で教授の授業を中断し、共産党宣言のオーディションも行った。

その為卒業時に桜井土木科長から厳しい譴責を受けた。現在は共産党と何の関係もないが、その関係を絶つ為の苦しい闘争に三年を要した。若気の至りとは言え、卒業間近に重要な授業を妨害したこと誠に申し訳ない事と反省している。

〈終わりに〉

卒業時に書いた随想文が度重なる転勤のために紛失していたが、先日コピーを送って頂き凡そ五十年振りに読んでいろんな事を思い出し、おかしくなったり何とも云えない気持ちになった。毎日が死と隣り合わせの時代であり、食糧を探しに走り廻った中で、真剣に考え行動していたのであると思う。戦中と終戦直後の幅の狭い選択肢の中の学生と、幅広い自由と行動が出来る今日の学生生活とは、比較も批評も到底出来ない事である。当時の私達の考え方や行動の軌範は、教授や友人或は世論からの限られた情報によって、何らかの理由づけを行うしか方法はなかったと思う。とは云え何かを求めて懸命に模索していたのは間違いない。

この時点での試練・経験による人間形成が、われわれのその後の人生の処し方に大いに影響を与えた事は確かである。

卒業時には生き抜く目標も自信もなく、就職もしなかった。ある時、父の縁故で鹿島建設の重役の方と御話をする機会があり、私と同年輩の若者が日本の復興のために懸命に仕事をしている、との御諭しを受け就職を促された。そして縁故採用ではなく、正規の入社試験を受ける方が良いとの御話もあった。

櫻井教授に御相談した処、それは良い、推薦しようと喜ばれ、昭和二十四年春鹿島建設に入社し四国支店に勤務することになった。同支店には工専で学んだ応用力学の教科書の著書の江藤禮さん（旧神戸高工教授）が支店

長を勤めておられた。処が折からのドッジ・ラインによる緊縮予算のためほとんどの公共工事が中断となり、社員整理の話も持ち上がり百数十人の若手社員は、労働力として現場で働き急場を凌ぐ事になった。体力腕力に自信のあった私は、一般労働者に交つての作業もやがて平気になり、トロツコ車輪挙げ競争で入賞する程身体も頑強になり、作業員たちも新人の私に一目おき指揮に従う程になった。それから間もなく朝鮮戦争等の影響もあり、好況時代が訪れた。鹿島は、日本の代表的な土木工事の施工に携っており、私は誇りをもつと共に気力充実の仕事に勉強に精進し、その一方で交友の輪も拡げていった。

やがて花の四十歳代に近づいた昭和三十九年、香川県坂出市に川崎重工で五十萬屯ドックの建造計画がスタート。当時私は同本社に近い神戸に駐在しており、ひんぱんに同社に足を運び激烈競争の末に当工事の受注に成功し主任技術者の重責を果たした。その後愛媛県での全長六千米の鉄道トンネルの建設にさいしては、片側から五千七十七米掘削する、日本初の設計施工の担当所長になり、月間掘進延長の日本記録を達成した。

次いで広島市での山陽新幹線のトンネル工事を担当。その直上の土被り四―六十米の地表に、約五百軒の新興住宅が建っており、そこを発破工法で掘削しなければならなかった。当工事の成否が博多迄の開通日を左右すると云われた。担当所長として全身全霊を傾けて住民と折衝し無事竣工することが出来た。これらの工事は何れも当時、鹿島全社中において五指に入る難工事で、その担当責任者になるのを誰もが尻込みした揚句、私にお鉢が回って来た曰く付きのものであった。大いに苦勞を重ねはしたが、いずれも成功し正に花の四十代を飾る事が出来たのである。

その後、近畿地方の数々の工事に携り、文字通り土木家冥利に尽きる充実感を味った。自慢めいた事を述べた

が、成功の要因としては数々ある中で、特に忘れられないのは苦況に追い込まれる都度出会った『時の氏神』的な人々、企業家、同業者、メーカー、住民等。その中の先輩知人友人等の「私を助けてやれ」と云う絶大な御支援であった。このことなくしては、どの仕事も成功していなかったと断言出来る。数々の幸運を授かったことを深く感謝している現在である。

いまの若い人々を見てみると、私達の時代に較べ仕事に生き甲斐を見出すより、金銭的な事に関心が強いと思われる。日本の将来が案じられてならない。

卒業後の軌跡

林 晴 直

昭和二十二年四月、卒業すると直ぐに、廃虚の大阪で港湾事業等の専門業者である阪神築港株式会社（現東洋建設（株））に就職して、大阪港災害復旧工事等に従事したが、十月に依願退社、建設省鳥取工事事務所に転職した。当時、同所長の中安米蔵さん（後の建設省技監）は、建設省直轄の河川千代川治水計画に適合させて河川工学―治水理論の確率洪水論を作成し、その成果を確認する試験論文を取纏中であつた。私は入所後、翌年の六月までこの仕事のお手伝いをし、翌七月鳥取県に入庁、以来昭和五十七年までの三十五年間、鳥取県技術吏員（地方公務員）として、土木技術をベースに建設行政―地方自治行政を担当した。

戦後の荒廃した県土―河は荒れ、道路や橋は到るところで壊れ、その早期復旧に苦心した。朝鮮動乱を機に始つた我が国経済の高度成長の波に乗り、増大して行く予算に対応した県民所得倍增政策の実現を期して、拡大し続ける業務―建設事業の執行に専念することになった。道路、河川、砂防、港湾漁港、都市計画（土地規制、都市改造、区画整理、公園、空港等）の土木行政の全分野にわたり個別事業の調査・設計・施工に携つた。更に環境保全、自然保護に配慮した新規大型開発を行うべく、島根県総合開発計画の策定に参画、事業間の調節を計り、公害の無い効率の良い建設事業となるよう頑張つた。

又昭和四十九年、世界住宅都市計画会議（IFHP）がオーストリアのウィーン市で開催された際、日本代表団の一員として参加し、我が国の建設事情、地方自治体の建設事業を国外から見て自信を深めた。私が担当した鳥取県建設事業の中でも、国鉄山陰線鳥取駅立体高架事業、千代川河口処理治水対策計画の立案、天神川流域下水道事業、重要港湾境港埋立土地造成事業は、歴史的事業として評価に値すると思つた。

公害論、列島改造論、第一次石油ショック、そして戦後初のマイナス成長を経て昭和五十年を過ぎた頃から大型開発にブレーキが掛り、事業の見直しを余儀なくされることになる。昭和五十一年から五十七年までは県企業局に移り、公営企業の経営を担当。水力発電、工業用水道、公有水面埋立土地造成、観光公園の各事業の収支バランスに配慮しながら先ず先ずの処で処理したと思つている。

この間、鳥取市建設部長、鳥取県土木部都市計画課長、鳥取県企業局長を歴任した。昭和五十七年三月、鳥取県を退職して、（財）鳥取県天神川流域下水道公社の設立に参画、以来平成二年三月までの八年間常務理事（理事長は鳥取県知事）として経営に當つた。

兎角法律優先で抽象的になり易い役人社会の中で、科学的技術的思考と倫理感重視の行動を基に、鳥取県政の発展、民生安定を目指して頑張ったと思う。これは良き上司、友人と優秀な部下の支えがあったからではあるが、私自身、神戸工専土木科十六期生三ヶ年の学生生活での級友との切磋琢磨、理想追求の試練―内面生活による自我の目覚めを体験をしたお陰であると痛切に感じている。

又専門土木技術についても、三ヶ年間学んだ工学の基礎習得のお陰で、仕事を遂行して行く上で自信を持って処理することが出来た。恩師を偲び心から感謝の意を捧げたい。

最後になったが、卒業から今日まで、多くの級友諸氏と出会う機会があったが、その際学生時代の姿たっぷり、お互い心置きなく話をする懐かしさは格別である。何時までも心の糧となつて消え去ることのない篤い友情であり、心から感謝する次第である。

他界された級友の面影を偲び、心からご冥福をお祈りする。元気で今日を迎えた級友の前途に、更なる光明の輝かんことを！ お互いに元気で頑張ろう。

（追伸）

平成二年から今日まで、鳥取県を離れて民間会社に入り、建設コンサルタント、国際航業（株）に八年間勤めた後、中部技術コンサルタント（株）に十年間勤務、今日に至る。

交友記

藤井基夫

我々十六期生は、昭和十九年に入学し昭和二十二年に卒業した。昭和二十年八月十五日は、ポツダム宣言受諾、無条件降伏で終戦となった日である。その終戦日は喜んで、戦中、戦後を折半する学生生活を送った。まことに、ユニークな世代だった。

戦前は、まだまだ封建性が色濃く残っていた時代で、軍国主義、全体主義教育の中で育った我々は、敗戦によって自由民主主義の洗礼を受けることとなった。この経験は、まことに得難いものであったと思っている。

明治時代の立身出世主義を信条としていた親を持ち、大正ロマンで育った師や先輩の影響を受けながらも、我々は軍国主義に支配された環境の中で育ち教育を受けた。それが、敗戦を境にして、殆どそれまで見聞きなかったデモクラシーの社会を経験させられたのである。しかし、私はこのように比較できる両時代を経験することによって、公正な価値判断に近づけるようになったと思っている。

学卒後五十年を経て、年齢は古稀を迎えながら、今尚学ぶことも、判断に苦しむ事も多い。ただ、他の世代の人達に比較すれば、まだしも是非の判断を正確に下せると思っっている。その自負は、戦前戦後の混乱期を経て、戦後の高度経済成長期の最中で働いてきた豊かな経験によって導かれたものだと思っっている。

このような得難い体験をしてきた私の学生生活の中で、特に親しかった友人との交友記を、回顧録に寄稿する。

が、戦後は読書量の多い山村の主張が優位になっていた。

こうした友達を持ち、二人の論戦の行司役を勤めた私にそれぞれ有益な影響をもたらしてくれたのである。因に私を含め四人とも当時としては大男に属していた。

学生当時の私は身長一・七三米、体重七五kg、鈴木の体格は先述した通りであり、林が最も身長があり一・八〇米近く、体重は六五kgとやせていた。身長は山村が最も低くて一・七〇米程度で体重も六五kgと少なかったが、彼は肩巾が広くて骨太の骨格を持っていた。林は面長で目も鼻も大きかった。山村は切れ長の目をしていて口、鼻とも大きかったが欠点は鼻が低かった。鈴木、林、山村とも浮世絵師の写実描く役者絵に似あう面相をしていたのを今懐かしく思い出している。

尚、鈴木は学卒後郷里の栃木県庁に勤務、その間に自家（農家）を次男に継がせ、身軽になった後、地元業者に勤め、同社の専務として今も元気に活躍している。山村は神戸工専を卒業後京大に進学し、高校の教職員になった。女子高校の校長を最後に数年前に退職し現在は陶芸等の趣味を生かして悠々自適の日々を楽しんでいる。

古稀迎え素直に祝えぬ明けの春

まだ元氣賀状にて知る老の友

秋霖は亡き親友の性に似ず（故大西礼二郎君へ）

学窓と社会

巻 島 徹 夫

今、卒業時に、各自が執筆した回想文を、あいうえお順に読みすすみ、玉川君の作まで読んだところである。多くの方が、青春の心の苦悩をうまく書いている。哲学者か、文学者の作かと思うほどである。それに対して私のもものは、何と散文的なのだろう。これが活字になると思うと、恥ずかしい次第である。

私はこのガリ版刷りの『回想史』を大事に保管していた数少ない一人である。何度も転宅したが、大事に持っていたのは、やはり神戸工専土木科十六期の思い出が大切であり、この三年の学業がその後の五十年の生活の原点であったからであろう。私の文章の中で、変革期にこの回想史が重要な意味があるようなことを述べているのは、ただ一つ評価出来るのではないだろうか。

日本補償コンサルタント協会誌の最近号の私の履歴書欄に、神沢輝男君が神戸工専時代を懐古した文章の中で、私達の同期生たちの特異な面を巧みに書いている。姫路高等学校の文科に合格しながら方向転向した人もあったようだ。桜井教授のこの回想史に寄せられた「感想」の文章の中で「諸君の入学時には特異性に依って他力的に入学を強いられたものがあり、且つ終戦後の自由な気持と自己反省に基く個性の再確認から自己の進むべき道を見直したものが出てきた。従って今後は社会の各方面に於て幅広く活動される事になるだろうと思ふ」といっておられる。まったくそのとおりとなり、先見性に驚かされる。

先生達は土木科十六期生の指導には、電気や機械系の科では考えられない大変なご苦労があっただろうと思う。

私自身も回想史で述べているように、高校入試に失敗し、地学や地形学に多少とも興味があり、それに近い理工系として土木を選んだだけであつた。しかし根が小心であり、家が大変貧しかったので、遊ぶわけにもいかず、一応土木技術者たらんと勉学に励んだつもりである。

入学して、幾ら促成の教育とはいえ、中学の授業とはちがったアカデミックの雰囲気があつたことは嬉しかった。田中教授の水理学の授業の中で記号や公式に出てくるCの発音がシーではなく、スィーに近く発音すること。Cだけでなく、英語の発音は厳格に発音されていた。今NHKの英会話の講座を聞いて当時を思い出す。私達の入った年から工專の入試には英語が無くなったが、三年になってからと思うが、桜井教授の橋梁学の試験に股野君が英文で解答を書いて教授の称賛を得たこと。学生の方にも語学力の秀でた者がいたわけだ。

桜井教授が教科書には無いことであつたが、鋼板の接合には、鋸から溶接に変つてきていることを力説された。川崎重工へ動員にいつて我々は鋼板接合のボルトを通す穴あわせをさせられていたのに、年下の工業学校の動員生徒が電気溶接をやっていたのをうらやましく感じたことを思い出す。

以上は先生を称賛した話だが、先生を謝らせた話を一つ述べる。卒業まぢかいころだつたと思うが、桜井教授が「君達は課長どまりだ」と何かの拍子に言われたのに、林君が「大志を抱いている我我に何と失礼か」と猛然と抗議して、先生を謝らせたことを思い出す。教授は何処の課長をさしていわれたかは、はっきりしないが、おそらく当時の就職状況から考えて、県庁の課長あたりを指しておられたのであろう。林君の当時の意気込みや、我々のクラスのリーダー役として面目躍如の思い出である。

昭和二十二年に建設省近畿地方建設局（当時は内務省大阪土木出張所）に入り、近畿地建の紀南国道事務所長を最後に四十六歳の若さで昭和四十七年に近畿地建を退いた。天理市建設部長となり、別段上昇意向があつたわけでは無いが、最後は水道ガス事業管理者となつた。誘われて現在の天理測量株式会社（途中で天理技研）に入った。三十名足らずの会社なので遊んでいるわけにはいかず、県道の改良工事の設計を六十五歳過ぎてからやりだした。私を誘った人が体調を崩して平成七年から社長を押しつけられた。公共事業費の削減がなされる中、どうして売上げを確保できるか、四苦八苦しているところである。卒業して五十年、その内二十五年は人口六、七万の奈良県の一地方都市に暮くつていたことになる。

ストレス解消に、又ぼけ封じのために、趣味を持てとよくいわれるが、まったく無趣味な男である。ただ歩くことが好きで、大阪市立自然史博物館の友の会と、国土地理院近畿地方測量部の人達を中心になって運営している「関西地図の会」に入会して、自然観察ハイキングにでかけている。若い時勉強しなかった地質や地形学への興味から入会したのだが、今は体力維持、気晴らしが目的となつている。もう一つ濱名昭夫の海外旅行の話に刺激されて、毎年夏と冬の休みに夫婦で海外にでかけることを楽しみにしている。七十歳を過ぎると十時間以上かかるヨーロッパへの旅行は、体力的に無理になつてきたから、そろそろ国内旅行に切り替える時期にきているようだ。

お互いにこれからの人生を夫婦とも健康で楽しく過ごしたいものである。

兄の戦死の意味と技術への疑問。こうした中では、とうてい学生時代の思い出や抱負など書く余地もなかった。これが当時提出しなかった主要な理由である。

三月の第三港湾建設局の採用面接試験では「技術への疑問」の問題が出てしまい、試験官と「議論」になり、四十分もかかってしまった。就職は諦めていたが、何のはずみか採用が決まった。月給七百円。その後自立生活の下で「動物的生存」を強要された生活の困窮、封建的人事管理、身分差別の存在、二・一ゼネスト弾圧後の青年部不要論との「闘い」などをへて、理想主義的正義感から、ついに、労働組合運動へ足を踏み入れることとなった。そして、二十八歳で労働組合本部専従以後、さまざまな実戦的経験と学習をつむ中で、一九六〇年の『安保闘争』を経て、科学的社会主義の思想的立場を確立した。以後今日にいたっている。

私の港湾建設技術者としての勤務期間は、通算七年弱にしかない。しかし、学校生活で得た知識とこの僅か七年の経験は、その後の労働運動の中でも、経済学の学習と相俟って、例えば高度経済成長期の終焉以降、当局の港湾計画論の分析と批判、直轄工事組織としての港湾建設局の必要性と具備すべき要件などの政策論樹立などに生きている。

神戸工専卒業生としては、ある意味では『異端』の人生を歩んでは来たが、いまでは、『我が人生に悔いなし』と言えるのが幸せである。

(一九九七年十一月二十日)

半世紀

松本 一郎

平成七年一月十七日午前五時四十六分だった。とろとろとまどろんだ時、突然激しく揺り起こされた。足元の箆笥を押さえつけていても振動が二段に別れて激しくなるのが判る。

P波が大きく揺れたが後半のは更に輪をかけて大きくなった。どの位時間が経過したか判らないがとにかく揺れる。揺れる方向は一定であるがS波は感じない。家全体が音を立てて飾箆笥の上のガラス細工が落ちる。置時計がもう少しで重心を外して落ちそうになる。大分激しい。その内に電気が消えてマッ暗闇になった。『いよいよ東海地震が来たんだ。こんなに揺れるんだったら地元東海地方だったらさぞ全滅に近からう』と思う。その内に地震はおわった。「大きな地震だナ」と思った途端ラジオに気がついた。携帯ラジオなら何とか電波が入るだろうと思うが探すのに一苦労だ。やっと見つけてスイッチを入れる。第一に入ったのは「近畿、中部地方に激しい揺れがあった」というニュースである。それなら震源地は琵琶湖周辺だろうと思った。電灯は相変わらず消えたままだ。三十分程たつたろうか。電気がついてTV放送が受信出来るようになって震源は淡路だと判った。たしか終戦の年の十二月だったと思うが、明石海峡の真ん中で地震があったと記憶している。余震が長く続いて桜井先生の授業中も何とはなしに落ち着かなかった。何れにしても大きな地震だった。

東京、大阪間で新幹線の所要時間が三時間を切るようになった。卒業して間もなく東京出張をいわれて車中十

している。われわれが最も知りたいと思つていた事が現実に手の中に入りつつある。

医学の進歩も驚く程で心臓の入替えが出来るようになった。今に頭のすえかえが出来ようになるだろう。科学が発達して万人に寄与する事はありがたいが、反面割り切りすぎてギスギスした人生を送るようにならないだろうか。宗教は停滞して何等発達していない。法然・親鸞・日蓮・道元が出て久しい。たまに出てきたらオウム真理教のような反社会性の強いものが若い者の心を掴んで広まっていく。オウムが正しいか否かは長い歴史の中で判断されようが、今現在は世の指弾を受けている。社会秩序は一応出来ているのである。

早いもので卒業してからもう半世紀もたった。鬼籍に入つた友人も数多い。幾多の思い出が過る。各自それぞれに活躍しただろうが生活も大変だったことだろうと思う。それでも次世代を任す孫もできた人もあろう。彼らは五十年前で一体どんな生活を送るだろうかと思う。

社会の移り変わりは夢である。

海軍施設部動員日記残照録

三 好 通 雄

何時しか馬齢をかさねて既に古稀。学窓を出て半世紀過ぎた今日、五十有余年前の学生時代をふりかえる。想出は今尚、鮮明に脳裡をよぎるが、その中で我々の世代しか体験し得なかった「海軍施設部への動員について」

断片的に記述してみたい。

(一) 動員嘆願決行

大東亜戦争も熾烈を極め戦局必ずしも我に利あらず、今こそ我等学徒も一時ペンを捨て直接戦力につながる海軍施設部に出動すべきと、クラス一同の決議に従い、血判嘆願書を携え、級友それぞれ手分けして、前線基地を訪ねることとなり、小生は四國の飛行場設営基地を担当した。当時は切符を求めるのにも難渋したが某君の知恵も借り、やっと手にした旅券を持ち、大西君と二人で設営隊長を訪ねた。その時、言下に隊長曰く、「君達の赤誠溢れる憂國の行動にこたえ、当海軍としては直ちに受入れの手続を取るからしばし待機せよ」と……。即決されたのは流石、帝國海軍士官と感激もし、意気天を突く思いであつた。

(二) 神戸駅頭の壮行会

愈々動員が決まり出発の前夜、明日別れたら何時又会えるかも知れずと地元出身の畑君等の計らいで、貴重な酒が持ち込まれ、美酒に酔い、談論風発とどまるところをしらず……。神戸駅頭の別れへと続く。ホームでは級友諸兄と抱き合い感涙にむせぶ友！ 乱舞して見送る友！……と。劇的なシーンであつたのも、今は夢、幻か！

(三) 海軍経理本部（関西）にて

林君以下数名は出動がおくれ、そのうち三名（岡、岩本、三好）は豊中は螢池（現在は阪大敷地）の海軍経理本部付となった。我々の仕事は隧道の建設であり、手薄になった技術士官の応援で準士官待遇という破格の扱いを受けた。

着任早々、主計中將殿の言や良し！「君達は自ら進んで学校を動かし、海軍に来てくれた熱血あふれる学生で

ある事を、先づ何よりも感謝し、頼もしく思う」……と朝礼で、居並ぶ士官達の前で褒められたのには、面はよい気持ちと共に、嘆願行動の事も逐一通報されていたのだなあと、感激を新たにしたものだ。

そのうちに「トンネル建設用の坑木(松)調達を命ぜられ、宝塚周辺の町村長を訪ね、酒を土産に学生の分際で、「何日何時迄に坑木〇〇本調達方ご協力下さい」と交渉にあたらせた当時の帝國海軍の威力には、おそれ入り乍らも、悦にいったものだった。

又ある時は木村先生に教わった測量実習を思い出しては、坑道の測量を得々と受持ったものの、その正確度心配されたが、途中で終戦となり、ボロの出なかった？　のは、せめてもの慰めか！　又経理部本部庁舎屋上での対空監視を視力二・〇の自信で、自発的に引受けたものの、米軍グラマン機の機銃掃射を浴び、身の竦む思いであつたが、ここで怯んでは男がすたと頑張り通したのも、今となれば貴重な体験か！

そしてやがて敗戦！　玉音放送をきき、しばし呆然としたが、二、三日後將官連中が背広姿で登庁してきたのには腹も立ったが、その一方で敢然と自決した壯身將校のいたのには何となく「あつぱれ」ととめどなく泣けたものだった。しかも自決前日、小生に「お前達は、これから故郷に帰り、祖國日本の再興を期して、幼少年の教育に力を入れてくれ」と言いのこされたのには、今も頭の下がる思いだ。

以上、とりとめのない思い出日記となつたが、閑話休題——。その後学窓を巣立ち、動員当時の海軍施設部が終戦後、運輸省建設部となり、さらに現在の防衛施設庁と引継がれた職場に、永く勤める事となつた小生にとっては、これも何かの「めぐりあわせ」であつたのではないかと思う今日此頃である。

理想と現実

森 繁 一

卒業後 私は建設会社へ入社した。

これは私の父がその会社創立から兄の社長を補佐して、永眠する迄の四十余年間苦勞を共にして来た経緯があり、自然の成り行きとしてこの道へ入る事となつた。そのため私はこの仕事にぞつこん惚れ込んでゐたとは云えず、多少の違和感を持って入社した事は事実である。それは会社へ入る時従兄の二代目の社長に「君はこれから何をしたいんだ」と云われた時「哲学・文学・宗教等を更に学んで人生を探究したい」「金儲けの為の守銭奴等にはなりたくない」と答えた。これには今から思うと社長もビックリしたと思うが、「金儲けはそれにより事業を拡大するための手段だ」と話された事を憶えている。

こんな状態で建設会社の現場へ足を踏み入れた訳だから、今迄の生活から心身共に百八十度転換させられた事になる。私自身頑健な体格でもなく、他を引張って行くリーダーマン的な勇氣を持つてゐる訳でもない。普通の人間だから、この社会に慣れるにはかなりの歳月を要した。今でもあの当時は苦勞の連続で下種の徒弟制度はこんなものかと痛感させられた。朝早くから叩き起されて寝ぼけ眼で食事を急いですませて現場へ行ったものの、土木技術とは全く無縁の出面取りデブ(労務者数の確認)。トロツコ積載量の検収。列車見張の笛吹き。時には土方と一緒に土掘り。等の下働きでやつと宿舎に帰って煎餅布団にもぐり込んで、寒さと蚤や虱に痛めつけられて

やつと意識朦朧として眠る生活が長い間続いた。その後も一年中休みは盆と正月位のもので、風邪を引いて休んだものなら氣持がたるんでゐるからだとかどなられた。だんだんそれに慣らされて来ると不思議なもので、休むと何か事故が起きる様な氣がして休む氣もしなくなった。

唯きびしさに身体は耐えられず、十二指腸潰瘍になり何も喉に通らなくなった事もあった。時にはやくざがらみの下請にドスを突きつけられ、ああ自分もこんな仕事に足を踏み入れた運命かなと一瞬思つた事もあった。

これ等は走馬燈の様に私の腦裏をめぐる思いの一端であるが、社会の厳しさを身を以て体験した事であり、當時頭は空っぽになつて辛抱を重ねた生活の連続であつた。

思えば既にクラスメートは十六名他界してゐるが、今まだ生を受けてゐる私は幸運であつた。唯一時的な体力は無かつたが、根氣よく続ける体力には恵まれてゐたのかも知れない。

この様な下積み生活を数年送つた後、工事現場では責任ある職場を歴任する様になつた。これは私が会社で一族の立場であつた事情とは別に、年令の近い上司が少なかつた事にもよる。これは私達クラスメート一般に云えると思う。あの戦争のせいで私共より年令の上の人は大半戦争に刈り出され、かなりの青壮年は戦死した社会環境のせいである。

その点今の若い人は前後に沢山の人がひしめいてゐて競争の真つ只中にあるのは、ある意味では同情出来る。更に氣の毒に思えるのは現在の我が国は、大東亜戦争の敗北感からまだ立ち直らないでゐる。国の自主性は欠除したままである。国民の力は経済大国と云われるまで成長したが、外圧には極度に弱体である。近隣諸国からは未だに贖罪を求められ土下座外交から脱しきれないでゐる。唯戦後与えられた民主主義の恩恵に浴してゐる事も

見逃せない。特に私共の年代層が順次年を経るにつれて新しい制度に恵まれて来てゐる事は不思議に思える程だ。労働基準法で過酷な労働時間から開放され、労災法で身の安全が守られ、健保法で健康が維持出来、年金法で老後の生活が保証され、世界一の長寿国となつた。今会社でも五十年の歳月を経て管理の立場になり、建設会社のあるべき姿もおぼろげながら判りかけてゐる。

請負会社は受注産業である以上、受注の営業活動が出发点となる。その後工事遂行に当つては施工面、品質面、予算面、安全面を四本柱として管理の徹底を図つて行く事になる。唯どんなに良い仕事をして、他から譽められようと、企業は利益を上げなければならない。適正な利潤が確保出来なければ会社は倒産する。これは資本自由主義の原点である。

これは卒業時と比較すると人間が變つた様に思われるかも知れない。然し私は変節してはゐないと思う。底に流れてゐる物は何も變つてゐないと思うし、そう思いたい。真善美の追究、それは碎けて云えば現実にあつて現状に満足出来ない。絶えず夢を描いていく。理想を追究する事だと思ふ。自分が立つてゐる位置は變つてもその思いは変わらない。でなければ学生時代のあの情熱は何であつたのか。唯の寄り道に過ぎなかつたのか。そうは割り切れない氣持は今この一文を寄せるに當つて、沸々と湧き上がつて来る。同志の友よ有難う。この思いを私は黄泉の国へ旅立つ迄抱き続けて行きたい。

第四章 『暁木会』 十六回生座談会

学徒動員と民主化の嵐の中の青春期

人生の原点となった工専生活

「青春とは、夢と野心に満ち、疲れを知らぬ若い時代」のことであると『新明解国語辞典』（三省堂）に記されている。しかしあふれるほどの夢を抱き、遠大なる野心を秘めていても、ひとたび荒れ狂う歴史のうねりが押し寄せて来るや、それらはまたたく間に呑み込まれて、木っ端みじんと砕け散ってしまう。昭和六年勃発の満洲事変を機に延々十五年間もつづいた戦争。そして人心も国土も荒廃し尽くした戦後の昭和二十年代。この時期、若き学徒たちは、戦中においては否も応もなく学問を投げ打って戦場に赴いて散華。また本土防衛のために地下工場を建設、あるいは兵器増産のためにハンマーを振るった。やがて急転直下、終戦。焦土の中、民主主義を叫ぶ者、茫然自失し虚脱状態に陥る者など様々な姿が見かけられた。

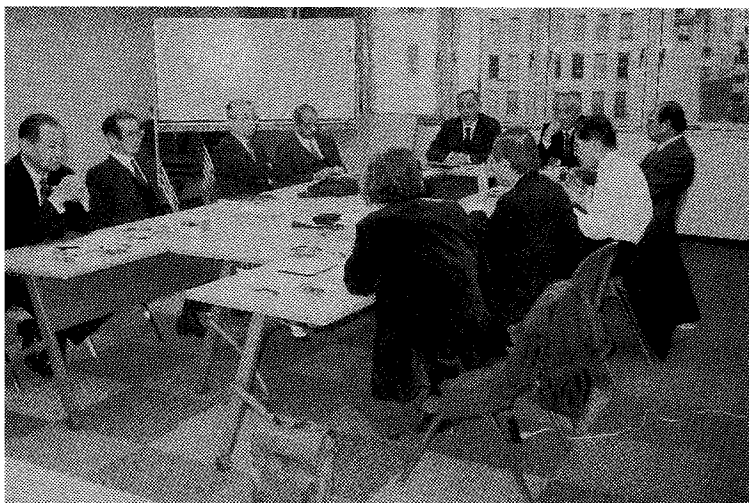
一方、こうした動乱の渦に巻き込まれることなく、遅しく立ち上がる学徒も少なくなかった。彼らは歯をくいしばって試練に堪え、鋼の如く強靱な精神力をしっかりと身に付けて学窓を巣立ち、日本を復興させる上で頼もしい推進力となるのである。『暁木会』十六期生も然り。戦後の土木建設の飛躍発展の上で大きく貢献するのであ

る。これらの原点となっているのが、工専三か年の学窓生活であった。そこで同期生の中から九名の諸氏に出席願ひ、戦中戦後にかけての工専時代と社会人として第一歩を踏み出した頃のことを振り返ってもらった。

●座談会出席者

(五十音順)

浅野 富美雄	藤 井 基 夫
神 沢 輝 雄	松 本 一 郎
中 沢 義 雄	三 好 通 雄
畑 良 昌	森 繁 一
林 晴 直	



暁木会16回生座談会（平成9年12月18日）

月月火水木金金の日々

司会 十六期生のみなさんが入学なさった昭和十九年という時代は、太平洋戦争たけなわと云いますか、戦局が一段と逼迫しつつあり、たとえば同年三月からは学徒動員令が施行され、年間四か月連続して軍需工場で働かなければならなくなった。さらに同年八月には大学・高専の二年以上の理科系学徒以外、すなわち文化系学徒や女子挺身隊を対象に勤労令が公布され、二か月後の十月には十七歳未満でも志願出来る陸軍特別志願兵令。翌十一月には中学二年生と国民学校高等科一、二年生に対して勤労動員令が発令されています。それがさらにエスカレートして、翌二十年三月には国民学校の初等科を除いて、すべて授業を停止せよという全学徒総動員令が打ち出され、文字通り国民皆勤の総力戦となっていきます。このような切迫した時代における神戸工専の様子――。まず十六期生の入学当時に振り返って頂きたいのですが――。

林 入学式は昭和十九年四月八日。その日は土曜日でもり空だったと思います。高工神社前の広場で入学宣誓式が挙行され、総代の畑君が宣誓を行った。新入生は八十名でした。

松本 それより八日前の四月一日付けで神戸高等工業学校が神戸工業専門学校と改称されていたので、われわれは、工専初入学生でもあったのです。戦雲は急を告げており、その翌五月から六月にかけて、先輩の土木や建築、機械など各科の二年生（十五期生）は、通年動員として呉海軍施設部などへ出勤していました。

林 われわれ一年生は在学して、猛烈なる勉強に明け暮れることになる。一日八時間びっしり専門学科中心の詰

め込み授業が行われ、その一方で週三時間以上、軍事教練でしぼられた。日曜は休みではあったが、必死になって復習しなければならないので、正に軍歌の「月月火水木金金……」の日々でした。

神沢 戦時下ということで、三年間の学園生活を六か月短縮して、二年半で切り上げることにになり、一日八時間というハードな授業になったわけだ。

浅野 実に辛かった。ちよつとでもさぼると、たちまち判らなくなるので、がむしゃらに勉強せざるを得なかった。

三好 田中先生が最初の授業で、いきなり英語で応用力学の講義を始められたのには驚いた。ごく一部の級友は理解出来たと思いますが、大半が判ったような判らないような表情をしていると「君たちは戦時中に中学校で学んだので語学は不得手なんだな。これからは日本語で講義をしよう」と云ってすすめられた。このときの授業がいまでも強く焼き付いています。股野君は語学が達者だった。

中沢 入学当時の印象と云えば、通用門を入ったところに二抱え以上もある楠が植わっていたことと、建築科の教室の赤い^{いっか}壁が鮮かだったこと。同じ学年であつても年齢が様々で、均一の中学時代とは異なるなアと感じました。それといまも思い出すのは、腹が減ってたまらなかつたことです。昼が近づいて来ると後ろの方に席を移して、授業が終わるか終わらないうちに飛び出して、学生食堂へ駆けつけ列に並んだ。するとあとからやつて来た三年生の猛者がずかずかと前へ行って食事を横取りした。けしからんと思うがどうしようもない。やつと食事を口に出来ても十分ではないので、次に校門前の食堂・高工庵へ走っていき、雑炊をかき込んだものです。

司会 雑炊食堂が登場したのは、みなさんの入学時より二か月前の二月。玄米のおかゆに野菜や魚肉を入れたも

ので、一人一杯二十銭と記録に出ています。しかし魚介類が入っていたのは最初の頃だけで、やがて大根の葉の切れはしや野菜くずが浮いている程度、米粒が数えられるほどの「増水」と呼ぶのが相応しいものになります。

三好 その通り。昼めしは高工庵でとることにしており、初めは箸が立つように濃い目の雑炊だったのが、日が経つにつれて箸が傾きはじめてに立たなくなってしまった。時々田舎から米をリュックに入れて運び、飢えをしのいでいました。

藤井 空腹を抱えながらも軍事教練に耐えたものだ。みんな精神だけは潑刺としていたね。

畑 十九年の五月十六日から二十二日まで青野ヶ原で軍事演習があったね。実に厳しくて悲鳴を挙げた者もいたが、演習を終わったあとの水のうまさ、そして粗末な食事でも実にうまかった。先ほど日曜日は休みという話が出ましたが、やがて日曜日でも六時間詰め込み授業を受けることになった。でもそうした厳しい日々であっても、ときには須磨へ泳ぎに出かけたり、人生について語り合ったり、ストームで氣勢を挙げるなどそれなりに青春を謳歌していました。

神沢 畑君は総代を務め、いちばん張り切っていた。校門の前に立つて登校して来る生徒を監視し、ゲートルを巻いていないと一喝していたね。

畑 私は土木技術を身に付けてお国のために役立てる、という確固とした目的意識を持って神戸工專に入りました。と云うのは、私の親戚の兵学校出身の者から『米軍は占領地にブルドーザーを使って、またたく間に飛行場を造り上げて、そこを足場に日本をどんどん攻撃して来る。ツルハシを振るったりモッコを担いでいるようでは

勝負にならないよ』と聞かされて、『よしっ、それなら、こちらでもアメリカに負けない近代的な土木技術を開発してやろう』と思つて入学したので、正直云つて張り切っていました。

林 私も早くお国に役立つ技術者になろうと思つて頑張つたものだ。十九年八月の初めには、加古川一〇四部隊の飛行場建設の手伝いで出勤し、六日間にわたつて測量実習に携つた。夜は仲間たちとどうすれば国家に貢献出来るだろうか。われわれは何を目的として生きるべきなのか、口角泡を飛ばして夜が明けるのも忘れて議論し合つたものです。

中沢 加古川では、航空機の燃料を入れる壕を掘らされた。宿泊先では、毎夜蚤に身体中かまれてなかなか眠ることが出来ない。それをまぎらせるため、よくみんなで歌を口づさんだものです。玉川君がディック・ミネの歌だったと思うが、ヘリンゴの木の下で……。と実に上手に歌つた。寢床の中で、味のある歌だなアとしみじみと聴いていた。昼の勤労の激しさや蚤にかまれているのも忘れるくらいその歌は心にしみ込みました。加古川から帰つて、コンクリート教室の木村先生のところへ行くと、蚤にかまれた個所にアンモニア水を塗つて下さり、これがよく効いてかゆみが取れました。

司会 夏休みはなかったのですか。

林 加古川への動員のあと、八月十六日から夏季休暇に入り、十一日後の八月二十七日から授業が始まりました。そして翌九月二十日には、繰り上げて十四期生の卒業式が行われた。

軍艦建造に出動

森 十六期生は、ユニークな連中が揃っていました。夏休みも冬休みもごく僅かしかなく緊張の日々がつづき、みんな身体を張るようにして生きていましたが、休み時間に漫談を一席やつて大いに笑わせてくれる級友がいたり、リベラリズムをとうとうと説く者がいるなど個性あふれる級友が少なくなかった。本来文化系にすすむべきところ、早期徴兵の問題から理工系に入つて来た連中も多く、哲学思想に真剣に取り組んで、一日一冊ずつ哲学書を読破する猛者もいた。私も人生というものを探求したい思いが強く、伴君の兄さんの蔵書などを借りて西田幾太郎、和辻哲郎、阿部次郎、カント、トルストイなどの著書を片っ端から読んだものです。

藤井 山村君は軍隊嫌いでヒューマニストだった。彼のことでは中央に現役ばりばりの配属将校の教官が立っており、建築科の生徒が上半身裸になつて走らされている。それを見ていた山村は、傍らにころがつていたメガホンを手にするや『この馬鹿教官、昼めしも食べさせないで、何が陣頭指揮だ。お前も一緒に走らんかい』とどなった。彼は正義感に駆られて思わず叫んだのですが、当時としてはとんでもないことで、私ははつとしたが止める暇がなかった。配属将校はその叫び声を耳にするや、血相変えて屋上に駆け上がつて来て『本官を侮辱した奴は誰だ、出て来い』と怒り心頭に発してどなった。山村は『ぼくが云いました』と直ぐ前へ出た。その表情には悪びれたところは微塵もなかった。それを見ていつそう激した教官は、その場でさきさん山村をなぐりつ

け、『貴様のような反軍思想を持つている奴は、即刻退学だ。軍隊へ送り込んでやる』と息巻き翌朝掲示板に『反軍思想の学生ゆえ、退学を命ず』と貼り出した。こんなレッテルを貼られて軍隊へ放り込まれたら生命はない。何とかしなければと畑君らと共に桜井先生に相談すると『あの配属将校は大の酒好きだから、それで攻略したらどうか』と云われて酒を工面し、四、五人で教官のもとを訪れ、寄つてたかつて酒をすすめた結果、『お前らの友情に免じて退学は取り消そう。ただし一ヶ月間停学だ』となつて一件落着となりました。

この事件をきっかけに山村君から啓発されて、河合栄治郎の著書から真・善・美について学んだり、西田幾太郎、河上肇や三木清などの哲学書にも触れるようになった。リベラリストでもあった彼は、よく人間の尊厳について話していました。

林 先生方の中にもリベラルな考えの持主、また哲学の大切さを諄々と説かれる先生もおられた。高田先生のカント哲学、浜田教授の道徳講話には強い感銘を受けました。

松本 桜井先生にも戦中戦後を通じていろいろお世話になったね。山梨工専より神戸工専に赴任され、土木科の発展に献身的に尽くされた。

司会 さて昭和十九年十一月三日、十六期生の学徒動員の出動挙行式が行われ、翌四日に神戸三菱造船所に三十七名、その三日後の七日に川崎艦船工場に四十名が出動されています。詰め込み授業や軍事教練で苦勞を重ねられたあと、今度は工作機械を扱うことになる。とまどいはなかったですか。

林 以前から覚悟を決めていましたから、それほど抵抗はありませんでした。私は最初三菱造船所へ出動し、午前八時から午後五時まで造機工場、経験のまったくない旋盤あるいはグラインダーやミーリングを操つたもの

です。そこには報徳商業と松蔭高女の生徒たちも動員されており、われわれは兄貴分として彼らの指導に当たり面倒をみました。そして空襲警報のサイレンが鳴るや防空壕に避難し、収まるや仕事に取り掛かるという日々がつづき、翌年の三月十三日に学校に復帰したのです。

松本 私は最初、川崎艦船工場へ出勤し工作機械を操っていましたが、印象深いのはオーストラリアの捕虜たちと一緒に働いたことです。大男たちが工員の帽子をかぶり監督の命令に従って、旋盤やボール盤を動かしていました。

畑 私も同じ工場だったので、大勢オーストラリアの捕虜が働いていたのを憶えています。警戒警報が鳴ると、彼らはいっせいに避難したが、われわれは空襲警報が鳴るまで作業続行だった。二ヶ月後に私は三菱造船所へ移動させられ、ディーゼルエンジン工場で働くことになり、ぶ厚い鉄板を直径十五センチ位のナットで締めたりしました。

三好 私も三菱で働いた。土木技術の卵なんだから測量などをやらせてほしかったが、機械科のような仕事に携ることになった。厚さ一メートルに、二十メートル角の鉄板を並べて、その上に特殊潜航艇のプロペラなどの図面を引き、一級上盤工がボルトの入る位置などをチョークで印し、われわれが穴を開けたりするのです。ところが突然、上盤工が結核で倒れてしまった。後任者は誰もいない。そこで監督官が私に『君は工專の土木科だろ。図面が判るんだからピンチヒッターであとを引き継いでくれ』と命じた。図面と云っても、機械科と土木科とはまったく異なる。しかも私はまだ一年生にすぎない。困ったなアと思ったが、「お国のためだ。当たって砕けろ」の思いで必死で勉強し、どうやら責任を果たし、監督官から上盤工の免状をやらうと云われました。寒い時

期でこの時の苦勞がたたって痔に罹ってしまった。

中沢 三菱造船所では、ディーゼルエンジンの軸受けを仕上げる仕事に携ったが、試運転に入った時うまくシャフトが合わなくて、徹夜で修正するように命じられた。まだ私たちは一か月経つか経たないのに、どうすればいいのか伍長（職工長）は十分に教えてくれないので弱った。必死になって試行錯誤を繰り返し、やっとテストに合格することが出来た。

森 私は川崎艦船工場で軸受けのすり合わせの作業に取り組みました。表面に赤い塗料を塗っては、削りながら上下を合わせるという単純作業なので、たいくつで仕方なかった。同じ工場でも部署によって、三好君や中沢君のように大変な苦勞を強いられています。

司会 動員先から学校へ復帰されたのが、二十年三月十三日、それから四日後の十七日の夜、神戸は油脂とエレクトロンの焼夷弾による大空襲を受けて、市内の西半分が壊滅的な被害を被り、神戸工專の校舎も土木科本館と土建実験室を残して、赤い薔の校舎などすべて焼失してしまいます。すでに同年の一月十九日川崎航空機明石工場、二月四日にはみなさんの動員先の川崎および三菱造船所がB29



神戸工專土木科第16期生の動員の頃（昭和19年）

に襲われて、多大な被害を出しています。中でもこの三月十七日の大空襲は死者約三千人を数える大惨事となり、神戸工専の教授や学生の中からも焼け出された方が数多くおられます。

森 それから間もなく新入生が入学して来ました。そのうち神戸三中出身の後輩たちの歓迎会を須磨浦公園で開き、苦勞して入手した酒をふるまったのはいいが、帰りの電車の中で教授に見つかり五人が停学処分となり、私たち数名は学校の焼け跡の整理に携った、苦しい思い出があります。

林 私は須磨の大手で下宿していましたが、岩本君が焼け出されたので一緒に住むことになり、さらにその後相次ぐ空襲で三好君や大西君、それともう一人福岡君が焼け出されて、私を入れて計五人が一つ屋根で共同生活をするようになりました。校舎の焼失後、間もなくして新学期を迎えるのですが、四月六日と七日、われわれ十六期生は神戸市港灣局に出動し、そこで四班に分かれて本庁、東部、中部、西部出張所に勤務することになった。防火貯水槽づくりや公舎の壁塗り、庭の草取りをさせられたのです。こんな作業にあたら時間を費すのは、情けないと云うか実に腹立たしかった。

畑 級友十五、六人と防火用水用の池を掘っていましたが、堪え難い気持ちでした。われわれは土木を専攻しているのだから、拙いながらもそれを生かしてほしかった。たとえば燃料倉庫や生産工場用の地下壕をつくるさいの測量などです。そうした憤懣が通じたのかどうか、やがて鶴越の高射砲陣地の三角測量に携ることになり、勇躍して現地に赴き三角点から荊藻島の電探基地の間を、トランシットを担いで走り回りました。最初監督官から三秒読み以内の誤差で行うように云われ、それは出来ないと思いましたが、二十秒読みで七回同じ角度を測ることで成果表を出したところ、ばかばかと命中した。陸軍から『神戸の高射砲の精度は日本一だ』と大いに誉めら

れ、面目をほどきました。

松本 たしかにわれわれの測量による命中精度は高かった。私も徴用工と共に森林を伐採して三角測量を行い、荊藻島の基地へ連絡していました。ときには敵機七十機の内、十機前後しかサイパンに還らなかつたと云うのですから、測量成果がいかに高かつたかを物語っています。

中沢 トランシットでは苦しい思い出があります。新開地の産業館が高射砲陣地の本部でした。そこで畑、佐々木、巻島、私の四人が測量の仕事をしていたときです。みんな先に出かけたので、私は慌ててトランシットを担いで営門を出た。そのときうつかり係官に敬礼するのを忘れてしまったのです。数歩はなれたとたん、伍長位の兵隊が『おい、貴様待てっ』と鋭い声で私を呼び止めた。と、さつと五、六人の兵隊が私を取り囲み、『無礼な奴だ、活を入れたる』とどなりつけた。私は弁解の余地はなく、殺されるかも知れないと観念した。そこへ徴用の主計少尉が本部から駆け付けて来て、『ここは俺に任せてくれ、ちゃんと処置するから』と云って助けてくれました。少尉のあとに付いていく私の背に、『貴様の名前は忘れんぞ。陸軍に来たら必ず営倉にぶち込んでやる。覚悟しとけっ』と兵隊たちは、罵詈雑言を浴びせかけたものです。少尉から『ここは学校ではないんだ。軍隊であることを忘れないように。これから敬礼はきちつとするように』と悟されました。ゲートルを巻いていたのですが、いささか反抗心から下駄ばきだったことも、兵隊たちの勘に触ったようでした。

配置転換の嘆願書

司会 昭和二十年六月五日、B 29 三百五十機が神戸を襲い計三千トンもの焼夷弾を投下。それまで市内の焼け残っていた地域もすべて灰となつてしまっています。一方、四月初めから米軍が沖縄本島に上陸を開始しており、六月八日には最高戦争指導会議で本土決戦方針を採択。というように国内外ともに物情騒然として来ます。みなさんとしても、何かしなければと、矢も盾もたまらない気持ちに駆り立てられていくわけですね。

林 防空壕掘りや防火用水づくりなんかにつつを抜かしておられない。『最もお役に立つ軍関係の建設部門へ動員先を配置転換してほしい』という声が日を追って高まって来ます。そして有志五、六人によって配置転換の嘆願書（『回想録』参照）を作成し、代表者二、三名ずつを選び、六月十七日に学校に無断で九州・四国・中国・近畿の四地域の海軍施設部へ派遣し、われわれの熱望を受け入れて頂くよう訴え掛けた。

松本 嘆願書の文章をガリ版に刻んだのは私です。それを手に各代表が呉、佐世保、舞鶴などの海軍基地へ向かったのです。

藤井 われわれが入学した十九年の十月末には、神風特別攻撃隊（敷島隊）が初出撃しており、これを皮切りに次々に特攻隊が編成されて、私たちと同世代の若者たちが敵艦隊に体当たりして散華していく。二十年三月には硫黄島で日本守備隊が玉碎し、本土空襲は日を追って激しさを加えていく。われわれはこうした状況を目の前にして、特攻隊に行かぬまでも、直接戦力に貢献出来る職場で働けるようひたすら願ったのです。

神沢 止むに止まれぬ若者たちの正義感のほとばしりから、自然の勢いで嘆願書が出来上がった。総代だった林君がリーダーシップを執っていました。

三好 私は大西君と共に四国の海軍飛行場の施設部に向かい、血判を捺した嘆願書を設営隊長に手渡しました。本書を一読するや隊長は、感激に頬を紅潮させて『君たちの愛国の情はよく判った。直ちに受け入れの手配をするから神戸で待機しているように』と熱っぽく応じてくれましたので、心の中で万歳と叫びました。大西君も大いに感激し、共に喜び勇んで帰途に着いたものです。

畑 各地の海軍施設部に嘆願書を届けたあと、一番早く反応があったのは、呉の海軍施設部でした。六月末にこの予備学生出身の菅原少尉が神戸に來られて、私、林君、佐野君らと会い、われわれの切実な願いは痛いほど判ったと感服され、『速やかに呉海軍施設部へ動員を受け入れてもらうよう交渉する』と云われた。

林 そしてその翌日、菅原少尉は工専を訪れて林教務課長に会い、配置転換について私たちの意図を説明し、早期実現に向けて善処して頂きたいとする述べられた。その場に私、畑、岩本君もいました。菅原少尉の話がすすむにつれて、林課長の表情は険しくなり、私たちに『いったいこれはどうしたことだ。由々しき問題だ』と詰問された。私は『どうもこうもありません。お国のことを思うわれわれの真摯な思いがからしめたもので、何ら恥じることはありません』ときっぱりと答えました。そして古宇田校長の判断を仰ぐということになり、校長室に席を移した。校長は私たちが学校に無断で配置転換運動を起したことを知って表情を変え、菅原少尉に坐るようにと声も掛けず、自身は椅子に坐って、菅原少尉が昂奮気味に語り掛ける話をじっと聴いておられた。少尉はいかにも青年士官らしく、力を込めて『使命感あふれる学生たちの意中を察してやって頂きたい。呉鎮守

府長官の強権発動で配置転換は出来ないことはない。出来得れば生徒を引率して呉へ帰りたいのだが』など、ときには強引とも云える調子で話をすすめていった。

校長は次第に怒気を含んで来て『そうした要望にはいっさい応じられない』と突っ撥ね、『私は文部省の方針に従って生徒を預り指導している。したがって海軍省の命令を聞くわけにはいかない。情勢の切迫していることは十々承知しているが、配置転換に関しては動員本部の指示をまつて善処したい。それと生徒が学校に無断で軍と直接交渉を行ったことは許し難い行為である』と強い口調で申し渡した。

畑 『嘆願書に賛同する生徒に対しては、泣いて馬謖を斬ることにする』と云われたので、これは無期停学になるなど覚悟を決めました。

林 終いには校長は激昂して、菅原少尉に『君、これは海軍省と文部省との喧嘩だよ』と声を荒げ、私たちに向かって『君たち若者に教授や技官の領域に口をはさまれては、学校だけでなく国家の存続が危うくなる』と朱を注いだような表情で、厳しく叱責された。林課長は顔面蒼白となり、小刻みに身体がふるえていた。結局、後日改めて学校として回答するからということで、菅原少尉にお引取り願った。

神沢 この事件で、林君はじめ私たち十二名が無期停学処分を言い渡されたのです。

藤井 私もその中に含まれていた。罰として七月十日から二十日間、神戸市の平野浄水場で沈澱している汚物を浚うという強制労働に就くことになった。陽差しが照りつける中、汗みずくになって鍬で汚物を掘り起こしては、モッコに入れて担ぎました。

畑 私もその一員でした。木村教授や田中教授が監督官として目を走らせており、私は怒りを抑えて黙々と働き

ました。

林 腹に据えかねたのは、学校がわれわれ十二名に無期停学を云い渡してから、何一つ連絡のないまま一週間後に、他の学生たちに呉や大阪などの海軍施設部への動員命令を発したことです。しかも翌日に出発せよというので、当事者たちは準備する時間も家族に通知する暇もなかった。

浅野 呉には二十七名が動員することになり、私もその中に加えられていました。

三好 七月八日の夜、神戸駅前の広場で出動員に対する送別会が開催され、送る者送られる者、お互いもう二度と会えないのではないかという思いが募り、号泣する者、固く握手を交わす者、万歳を叫ぶ者など青春の熱き血潮が爆発した感じで、この時の感激は忘れられません。それから二日後の七月十日には、大阪海軍施設部へ二十名が出動していった。

司会 平野浄水場での重労働は、七月三十一日に解除されますね。停学処分を受けられた方々は、そのあとのどのような方面に行かれたのでしょうか。

神沢 私は加古川市の北西部にある北条町の手軍施設部に出動することになり、川西航空機の地下工場と地下要塞を建設する仕事に就きました。現場には五百人ほど第三国人が強制労働に就いており、迷路のように隧道を穿ち、数か所にコンクリートの部屋を造っていました。私は海軍准尉の肩章を付けてもらいある日、現場近くを歩いていると、兵隊が十人ほど列を組んで近づいて来て、『頭あーっ右！』と号令を掛け、いつせいに私に敬礼をした。最初誰にしているのだろうかと、ぽかんとしていたら、私に対してであったので、慌てて答礼したものです。浄水場での強制労働とは打って変わって、そこでは銀しやり（白米）がたらふく食べられたし、タバコも吸

い放題だったの、ありがたかった。

林 私は浄水場で数日間働いた後、大阪城にあった中部軍管区司令部から出頭を命ぜられて、吹田市の陸軍経理部教育隊に入り、建設技術委託生として服役することになり、そこに終戦までいました。

三好 私と岡君、岩本君の三人は、豊中の蛍池にある海軍経理部付きとなり、準士官待遇で隧道の建設に携ることになりました。入部早々朝礼で主計中尉から『彼らは軍に貢献しようとして学校を動かし、すすんで海軍に来てくれた、憂国の情あふれる学生たちである』と居並ぶ士官たちを前にして紹介された。面映いと同時に「ああ、われわれの行為も無駄ではなかったのだ」との思いが込み上げて来て、胸がいっぱいになりました。

藤井 私は同僚五人と共に大阪海軍施設部隊に動員され、準士官待遇となり、いまの千里ヶ丘で軍用トンネル倉庫建設のための測量に携ることになりました。作業員は水兵約百名、朝鮮人の工員約五百名がいて、朝昼晚いずれもジャガイモが主食であり、士官でも白米食は週に二晩しか口に出来なかった。ところが地形測量を担当する私と滝野君には、昼食に白米食の弁当を用意してくれたのです。出かけるさいは、朝鮮工員二人が測量用具やポールを持ち運んでくれるんですが、彼らは空きつ腹だから動作がぶくって涉らない。そこで私らの弁当を半分ずつ彼らに与えた。これが彼らの仲間の間でたちまち評判になり、毎日交替で道具運びをするようになった。そのため毎日仕事を一から教えなければならなかったので苦労しました。

そして終戦を機に彼ら工員たちは、厳しかった士官や下士官を脅し始めた。その時工員たちのリーダー格だった金氏（柔道五段）が私たちに『あなたたちには大変お世話になったので、一切迷惑はかけない』と約束してくれました。これを耳にした部隊の総監督は、私たちに土下座して『朝鮮工員たち全員が引揚げるまで、ここに留

まってくれ』と懇願。そのため私たち五名は、工員たち全員が汽車で引揚げる八月末まで、この部隊に留まるはめになったのです。

終戦——全級友再会

司会 お国のために殉じようとする学生が圧倒的に多い中、山村さんのようにクールな目で世情を捉え、人の生命を軽んずる軍隊は嫌いだと言う学生も、ごく一部にしろおられたことは忘れてはならないと思います。

森 私も軍隊は好きではなかったが、山村君のように明確に意思表示することは控えていた。大きな時代のうねりにどうすることも出来ないと思ったからです。二十歳で徴兵検査があり、余程のことがない限り戦場へ赴くことは不可避であって、それは死に結び付いていた。理工系にしろ卒業すれば、それを覚悟しなければならず、つねに死生観がつきまといました。神戸大空襲のあとは焼け跡の整理や軍需工場で働きましたが、いずれは戦場で散ることになるだろうと覚悟していました。

林 先ほど少し触れましたが、先生の中にも、いたずらに学生を戦地へやって、あたり才能を死滅させてはいけない。日本の将来を背負って立つためには、若い命は大切にすべきだと話される先生もおられた。高田先生や浜田先生らがそうでした。

司会 しかし異常とも云える時代であるだけに、青年たちは血気盛んで死に急ぐ傾向も多く見られます。たとえば、みなさんと同期の松末誠一さんの『回顧録』によりますと、江田島の海軍施設部へ出動するさい、生きて帰

れないと兄の軍刀を携えていったと記されています。軍事施設に出動するにあたっても、死して帰らじと覚悟を決めて、赴く若者も多くおられた。

浅野 私はそこまで覚悟はしていませんでしたが、戦局は厳しくなる一方で、いつまでもに授業を受けられるか見当がつかなかった。江田島で一週間ほど教育を受けて、広島県の廿日市で地下工場建設のための三角測量を行っている、ピカッとすごい光が走った。二十年八月六日の朝でした。はっとしてその方角を見ると、キノコ雲がむくむく湧き上がり、とたんに激しい爆風に身体が叩きつけられた。慌てて地下壕にもぐり込んでみると、夕方黒い雨が降り出しました。その日、原子爆弾が投下されたんです。翌日、救護活動のため海軍のトラックに乗って広島市内に入ると、いたるところ焼いたメザシをずらつと並べているように焼死体ごろがっていた。それまで神戸で何度か空襲の現場を見ており、残骸が横たわる中にわずかながらまともな建物も残っていたのですが、広島市の街はまったく何もかも完全に消え去っていました。この惨状を目にした時、これは大変なことだと体がふるえるほどのショックを受けました。

松本 一発の爆弾が一瞬にして二十万人近い人命を奪い去り、ありとあらゆるものを破壊し尽くし、さらに三日後の八月九日には長崎にも投下、死者七万三千人もの犠牲者を出した。私はその頃、大阪の海軍施設部に出動しており、茨木にある山裾に地下工場を建設中でした。そこで終戦を迎えたあと、広島や長崎の惨状と、その悲劇をもたらした新型爆弾が原子爆弾であることを知りました。

浅野 現地では、すぐにあれは原子爆弾だとささやかれていました。それから間もなくして廿日市で玉音放送を聴き、乗客が鈴なりになっている満員列車を引つ張る機関車のアームに乗っかって帰省しました。

司会 放射能の被害はありませんでしたか。

浅野 幸いその後身体に異常はなく、今日まで元気にすごすことが出来ました。終戦後郷里の高知にいて、学校の方はどうなるのだろうと心配していましたら、九月に入ってから登校するようにとの通知が来て、帰心矢の如く神戸へ向かい、九月十日の授業再開の日、動員で離れ離れになっていた級友たちが一人も欠けることなく再会出来たときは、何とも云えず嬉しかったですね。

林 その二日前には応召中の桜井先生も復員されていた。私は畑地と化していたグラウンドの中を通過して、焼け残った土木教室に入り、一人一人級友の顔を見たときは、涙が出るほど感激したね。

畑 下駄ばきや長靴、ズックや草履をはいたり、服装は詰襟や国民服、中には軍服を着けている学生もいた。食糧難の当時、誰もがすき腹を抱えていたが『新しい時代が始まるんだ。これからは民主主義だよ』と声高に叫ぶ者が多かった。私は『何を云いやがる』と腹が立ってならなかった。お国のために生命を賭して尽くそうと頑張っていた矢先、突如、玉音放送が流れ世の中が百八十度転換してしまったので、私は呆然自失、しばらくは何を目標に生きていけばいいのか判らず、卒業後も働く気力が起こらなかった。授業をさばりはしませんでした。

松本 校舎はほとんど焼失しているので、本校と滝川中学の校舎を借りて授業が再開され、土木教室では午前中に一部、午後には二部の授業が行われた。その一週間後の九月十七日には、十五期生の卒業式が行われ、七十六名が学窓を巣立っていきます。さらに同月二十五、二十六日の二日間、進駐軍の関西駐留のため臨時休校、同時に二十六日には学校報国隊の解体命令が出されるなど急転直下、時代は大きく様変わりしていった。

藤井 九月中旬に十五期生が卒業したことで、われわれが最高学年となります。しかも十月四日から元通りの三学期制となり、以後卒業まで一年半にわたって、学園の民主化推進や反動教授弾劾の声が吹き荒れる中、神戸工

専の健全な復興のため、土木科がリーダーシップを執って活躍する。

林 学生大会で『反動教授を裁判にかけるべきだ』と強く主張する声が挙がった。その時私は土木科を代表して『学内の民主化については賛成だが、いま一番必要なのは、焼失して実態を失っているわれらの工専を復興させることではないか。復興を着実に実現させる過程において、民主化の障害を取り除いていくようにしようではないか』と提案し賛同を得ました。当時、過熱気味だった学生運動に振り回されることなく、冷静にものごとを判断し、説得に努めたことで、難局を乗り切ることが出来たのでした。

神沢 昭和二十一年の五月十日に松野実業校に一部移転し、翌六月の二十六日、当校の講堂で全科全生徒参加のもと校友会が発足し、林君が会長に選ばれた。そして十二月四日から松野実業へ全面的に移動することになります。

松本 それから三日後の十二月七日から九日にかけて、松野学舎で工専創立二十五周年記念祭が開催され、学芸大会では土木科はピアノ独奏と演劇『父帰る』と『老人の画像』を上演、観衆の拍手喝采を浴び、後者は演劇コンクール一位の栄冠を手に入れました。たしか森君が舞台装置を担当したと思います。

森 そうです。ゴーゴリの原作を山村君と西川君が脚色し、演出は西川君が担当した。兩人共文学や演劇に造詣が深く、哲学思想面でも一家言を持っていました。〔回想史〕参照)

戦後復興の担い手

司会 昭和二十二年三月十五日に工専十六期生の卒業式が行われ、土木科から七十九名(一部)の方々が学窓を巣立っていかれました。当時は「食糧メーデー」(二十一年)や「二・一ゼネスト中止」(二十二年)、社会党各班連立内閣が発足(二十二年)。また「ニコヨン」(日雇労働者の日当二百四十円の意味)という言葉も生まれています。戦後の混乱がつづいており、巷には失業者があふれている時代であり、果たして日本はどうなるのか、まだ手探りの状態です。こうした時代に社会人として第一歩を踏み出されたみなさん方は、また学園生活とは異なる世界において、大変なご苦労をなさったことと思います。中沢さんはどういう方面へ就職なさったのですか。

中沢 世の中が混沌としていたこと、友人が電気関係へすすんだことで、桜井先生の紹介で、日本放送電株株式会社に入社試験を受ける予定でした。ところが過度経済力集中排除法などいろんな問題が生じて断念せざるを得なくなり、そこで港町神戸の立地条件や進駐軍が多いことなどから通訳をめざしました。しかし固い職場がよいというところで、神戸市役所の試験を受けた結果、道路課に配属され、私のその後の人生航路を決定したわけです。戦争の影響で中間管理職員が少なく、若造の私が短期間で重要ポストに就くことになったため、その責任を果たすことに夢中になっているうちに現在に至りました。一日一日が勝負でしたな。

森 現神戸市長の笹山氏が神戸工専の一年先輩で、その下に中沢君が就き片腕となって活躍し、笹山氏が助役になられたとき後任の土木局長に就任。土木行政で実績を大いに挙げたことは、誰もが認めることです。

浅野 私の場合は実に単純です。学生時代の出欠簿はアイウエオ順に青山、浅野、荒城と連なっており、親友でもあった荒城君は国鉄の依託生だったから、戦中戦後の切符入手難の時代でもパスで簡単に乗車出来た。これが羨しくてならなかった。さらに青山君も国鉄に入ったので、「よしつ、俺も国鉄に入ろう」と郷里に帰ってその希望を果たし、保線工区や管理部に務め、以来四国から一步も外へ出ていません。ある年、四国管内でひょっこり畑君に会ったのには驚きました。

畑 鹿島の四国支店に勤務していた時、会社の車が踏切事故を起こしたとの連絡が入ったので、現場へすっ飛んで行くと浅野君が立っている。「やア、君か」とお互いに声を掛け合ったのはいいが、列車にはねられて路傍に横倒しになっている社の車を見て、無性に腹が立って来た。と云うのは、半年ほど前からこの踏切は幅員が二メートルしかないの、安全性のため三メートルに拡張してほしいと国鉄当局へ申請書を提出していたのですが、うんとすんとも連絡がない。そのために事故が起こったと思ったので、あやまるどころか『お前のところが拡張しなかったから、そちらに責任がある』とどなりつけた。学友と久しぶりに再会した喜びもあって、つい調子に乗って荒い口調になったかも知れません。浅野君も苦笑しながら『神戸の人間が、ようこんな山奥へやって来たなア』と懐旧の念にかられていました。

藤井 私は桜井先生の紹介で林君と一緒に東洋建設へ入りました。日本の復興がすすむにつれて、土木建設の技術は日進月歩で改革されていき、地質分野でも新しい土質工学が誕生するなど毎日が勉強でした。

したがって、参考文献やノウハウの書物を片時も手離せなかった。しかし、つねに最先端技術の中心に身を置いたことで、それが血肉と化し、会社の事業発展の上で大いに役立った。上司はわれわれより一回り以上も年上

なので、最新の技術に直ちに付いていけないのです。本来なら三千代のベテラン技師が中心になるべきなんです。戦争の犠牲となつて空白になっている。それをわれわれ技術屋の駆け出しが何とかしてフォローせざるを得なかった。夢中になつて仕事に取り組んでいるうちに、いつしか高度経済成長の第一線を担う立場になつていたのです。最初、私は請負業が自分に向いているとは思わなかった。出来得れば文化系の世界へすすみたかったのですが、森組の社長であつた従兄に説得されてこの世界に入ったのです。中堅クラスの企業でしたから、特に技術面で困ることはなかったのですが、仕事をこなす上で苦労しました。睡眠時間四、五時間。休暇は盆と正月だけという、正に昔の徒弟制度のような過酷な労働条件でした。しかし当時はこれが一般的でもあり、私は身を粉にして働きました。こうした苦勞を堪え忍ぶことが出来たのは、おそらく学生時代に培われたと思います。いかなる時にも前を向いてすすもう、どのような障壁が立ちかはだかつて、それを克服することで価値あるものに到達出来るのだ、という根性を失わなかつたことです。現在も厳しい業界ではありますが、その中に光明を見出しながら前進する気持ちに変わりはありません。

松本 戦後、驚異的な高度経済成長をもたらす上で、一つの起爆剤的役割を果たしたのは、若者たちの気概と戦中海軍や陸軍で技術開発に取り組んでいたスタッフであつて、戦後彼らは民間企業や国鉄に入り、ぞんぶんに腕を振るい技術革新をもたらした。私は工専を卒業後、阪神電鉄に入社し、鉄道建設関係の研究を重ねるにつれ、そのことを強く感じました。特に新幹線の開発は画期的な出来事であつて、一鉄道だけに止まらずいろいろな面で技術力向上に影響を与えている。私としても非常に勉強になりました。

三好 われわれが本格的に勉強出来たのは、社会に出てからです。学生時代はほんの僅かのものをただ詰め込ん

だにすぎなかった。いま海軍の技術陣の話が出ましたが、戦後、海軍施設部が運輸省建設部となり、そこに私は就職しました。ところが、やがてこの施設部が防衛庁建設部となったのです。因果はめぐる云うか、縁の不思議さをつくづく感じます。

神沢 私は戦中は動員に、戦後は社会科学研究所に時間を費やし、詰め込みどころかほとんど勉強しなかったの
で、卒業後は同志社大学の法学部へすすみ、社会へ出てからは、大阪防衛施設局、近畿地建を回り、現在、日本
不動産研究所に勤務してます。振り返ってみれば、級友たちの熱き友情があつたからこそ、今日の自分があると思
います。

林 藤井君と同じ会社に入ったのですが、どうも私の性分として、頭を下げて仕事を頂くことは、出来そうにな
いので、一年足らずで仕事を発注する側に鞍替えしました。郷里の鳥取県庁です。幸いそこにはトップレベルの
技術官が揃っており、大いに刺激を受けると同時に、広い視野から建設業界を把握することが出来ました。そし
て全日本建設技術協会の拡充発展にもいささか貢献出来、自分の選んだ道はまちがっていないかと思ひます。
青春期を激動の波にもまれたことで、並の人生の何倍もの貴重な経験を積むことが出来、これが大きなバネと
なつて、社会人としても十分に手応えのある仕事が出来たのではないのでしょうか。

司会 まだまだ拝聴したいことが山ほどありますが、紙面の都合もあり真に残念ながらこの辺りで終らせて頂き
ます。現役で頑張っておられる方々もさることながら第一線を退かれた方、どうぞこれからも一花も二花も咲か
せて頂くよう、ご健勝ご活躍を心より念じております。ありがとうございました。

(司会と文責・遠藤章弘)

教官名簿

(卒業当時)

(順序不同)

校長	田中重芳	教授	村上正和
土木科長	櫻井季男	教授	野地修左
教授	武田英吉	教授	品川秀雄
教授	吉川留吉	教授	芳井正雄
教授	田中茂	教授	林連一
教授	樋渡正美	教授	梶田哲治
教授	木村恵雄	教授	田伏勉
教授	古道正造	助教授	岡野兼夫
教授	浜田政二郎	講師	奥中喜代一
教授	金澤隆	教授	永井莊七郎
教授	志賀正	教授	南埜繁夫

第十六期生 名簿
(卒業当時)

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
明石中	灘中	岡山工	三豊中	丸亀中	神戸三中	五條中	豊岡中	神戸二中	北野中	神戸一中	二中夜間	長野中	城東中	北野中
岡田公良	岡島博	岡克己	大西禮二郎※	大西崇	大島秀和※	浦本貞夫	岩本哲雄	市川耿介	生野斌	猪口弘	安東彦※	荒城阡治※	浅野富美雄	青山正樹

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
鳳鳴中	郡山中	滝川中	神戸一中	検定	都島工	神戸二中	伊丹中	小城中	神戸三中	姫路中	明石中	加古川中	一中夜間	赤穂中
佐郷忠男	佐伯章美※	河野道雄	好田豊	後藤香蔵	小山清	栗川淳※	栗岡宏	國信茂磨	衣川正	喜多村弘	神沢輝雄	金沢昭二	片岡勇	鍛治拓美

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
滝川中	灘中	津工	滝川中	津山中	明石中	都島工	都島工	京都中	京都一中	姫路中	宇都宮工	滝川中	市岡夜中	茨木中	開成中	灘中
中島治	中澤義雄	中川宗重	中川福督	豊久政邦※	豊田幸生	寺尾昭	玉川新作※	滝野秀男	大工原襄	多田隆一	鈴木安重	鈴木泰次※	島谷敬一	酒井武彦※	佐野茂生	佐々木司郎

64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
滝川中	膳所中	都島工	高松中	開成中	専検	関西工	神戸二中	灘中	神戸二中	神戸一工	神戸三中	高津中	膳所中	明石中	芦屋中	滝川中
間嶋力	藤井基夫	福田力三※	福岡英夫※	伴重雄	林晴直	濱名照夫	浜崎一博※	畑良昌	橋本英一	野村靖二※	幣守昭	西本博	西川龍三	中部清八	中西猛仁	中塚守

65	神 港 中	前 川 重 義
66	神 戸 一 中	卷 島 徹 夫
67	姫 路 中	股 野 宏 志
68	小 野 中	松 末 誠 一
69	都 島 工	松 本 一 郎
70	神 戸 三 中	三 木 俊 一 郎
71	三 豊 中	三 好 通 雄
72	尼 崎 工	村 田 勇

73	神 戸 三 中	森 繁 一
74	岡 山 工	薬 師 寺 克 己 ※
75	京 都 二 中	山 田 直 靖
76	尼 崎 中	山 根 敏 弘
77	尼 崎 中	山 村 壽 一
78	神 戸 二 中	山 本 雅 也 ※
79	姫 路 中	吉 田 正 和

(※は物故者)

編集を終えて

「木守り^{まもり}」という風習が各地にある。願いごとと云うか、まじないと云うか、翌年の果実の収穫を願って、柿や蜜柑などの枝に一つか二つ実を残しておくのである。本書もこのような気持ちから発刊を思い立った。

太平洋戦争の後半から敗戦後にかけて、三年にわたる学生生活を送った青年たちの赤裸々な告白がここにある。ある学徒は国のために戦場で華と散り、或る学徒は情熱を打ち砕かれ帰国を余儀なくされた。また内地では救国の念もだし難く、厳しい校規の下、動員に汗水を流す者、深く自らを見つめ自己研鑽に励む者、本来の技術学習に精を出す者等々、各人各様真摯に生きつづける若者たちの垣塙^{かき}がここにある。

爾後五十年、この歳月は長いようでもあり、短いようでもあった。巻末の第十六期生の名簿は旧『回想史』の発刊時に記載されたものであるが、この間、幾人か級友が黄泉の国へ旅立っている。熟年を迎えた我々も、定年後悠々自適の生活を送る者、第一線で活躍中の者等々である。いずれにしても卒業後五十年を迎えたいま、当時を振り返ると感慨新たなものがある。多彩であった我々の工事時代は、特別な時代背景を抜きにしては語ることが出来ない。その生活ぶりには、特異な時代色が縮

図となって現れており、本回想史はそのことを示す貴重な証言でもある。

卒業後の五十周年にあたる平成九年四月の記念同窓会において本書の発行を提案し、賛同を得て同年夏から編集委員一同と共に編集作業をすすめていった。

その間、田中先生をはじめ多くの級友たちのご協力を得、また朋興社の遠藤章弘氏のご支援を得ながら、往時を振り返っての随筆と座談会を折り込み、刊行に漕ぎ着けた。ご支援ご協力を頂いた方々に心より感謝申し上げますと共に忌憚なきご意見を拝聴出来れば幸いです。

平成十年四月吉日

森 繁 一

神戸大学晩木会十六期生
激動の青春譜

平成十年四月二十三日発行

編集 神戸大学晩木会十六期生回顧録編集委員会

制作 有限会社朋興社

530-0041 大阪市北区天神橋三一九-一 昭和ビル
TEL 〇六-三三七-一七二三

発行 神戸大学晩木会十六期生回顧録編集事務局

550-0014 大阪市西区北堀江二-二-一七
TEL 〇六-五三九-〇〇九〇

印刷 ナニワ印刷株式会社

530-0043 大阪市北区天満一-九-一九
TEL 〇六-三五一-七二七一